

# 北村千代治小伝

—海を渡った考古学者—

相原 淳 一 (東北歴史博物館)

大出 尚 子 (学習院大学客員研究員)

はじめに

I アメリカ渡航まで

II アメリカ時代

III 東北帝國大學時代

IV 「満洲国」国立中央博物館時代

V 宮城民事部経済課顧問兼通訳時代

VI その後

おわりに

註

引用・参考文献

## はじめに

2011年の3.11東日本大震災で建物に大きな被害を受け、建て替えることとなり、自宅にある考古資料の処分に困り、文化財として活用できるのであれば、博物館に寄贈したい旨の相談を受けた。こうして、ここに紹介する北村千代治氏の長男仁氏の妻優氏から2015年にご寄贈いただいた貴重な資料は、学史上ほとんど知られていない故北村千代治氏収集によるものであり、ほぼ空白のまま残される戦前・戦中・戦後まもなくの考古学の歩みに一筋の光をあてるものであった。限られた資料ながら、北村千代治氏の小伝としてその事跡をたどる。

なお、第IV章第1節は大出尚子氏の筆によるものであり、表2の「満洲国」時代の年譜は氏が主となりまとめたものであることを付記しておく。

## I アメリカ渡航まで

### (1) 北村家

千代治が生まれた北村家は、加美郡鳴瀬村の旧家で、檀那寺の大祥寺過去帳に記録が残っているという。それによると、遠祖は天正年中下新田城主葛岡監物の武将であった内出道満に始まり、道満は1588(天正16)年の伊達大崎合戦で戦死し、その子孫は伊藤氏を名乗り、北村氏はその分家筋とされる。初代

北村家は1713(正徳3)年10月2日没の骨霜監銭信士、以下7代続き、8代五右衛門が同じく元禄年間に苗字帯刀を許された安藤家から入婿し、千代治の父周治が9代北村家の長男として誕生した。

千代治には2人の兄、1人の姉、1人の弟がおり、長男が家督を継いでいる。

### (2) 東京まで

北村千代治は1890(明治23)年10月5日に鳴瀬村下新田に北村周治・とわの三男として生まれた。後年、進駐軍に提出したPersonal History(履歴書)の写し(図37-9)が残っており、以下、それに従う。1910(明治43)年に古川中学校卒業後、東京正則英語学校(神田錦町/仙台出身の斎藤秀三郎開校)高等科に進んだ。1916(大正5)年に千代治はAmerican Penman Branch School(アメリカ書家学校分校)から修了証を授与された。その中には6年間の修業と記されており、東京正則英語学校はAmerican Penman Schoolの提携校とみられる。

この年の9月15日にはCalifornia州Riverside市在住のMorikawa氏に手紙を送っており、移民の具体的な準備に入ったものと考えられる。

北村は翌1911(明治44)年3月6日、就学目的(for study)でアメリカに渡航し、サンフランシスコ港に立った。

## II アメリカ時代

### (1) カリフォルニアにて

日本からのカリフォルニア移民は1887(明治20)年に始まり、過酷な労働条件ながら、夢や職を求め多くの日本人が移民となって渡った。勤勉な日本人はやがて彼らの職を奪い、日本街をはじめとする閉鎖的な日系社会を作ると、日本人は差別的な扱いを受けるようになった。1894(明治27)年には日本人移民は「自由な白人」に相当しないと、市民権取得は不承認とする決定を裁判所が下している。1900(明治33)年には各種労働組合による大規模排日デモ、1905(明治38)年にはアジア人排斥同盟がサンフランシスコで結成されている。

一方、1906(明治39)年4月18日にはアメリカ自然災害史に残るサンフランシスコ大地震があり、地震とその後の火災で当時のサンフランシスコ市民約40万人のうち、半数以上の22万5千人が家を失ったとされ、北村が渡米する1911(明治44)年頃のロサンゼルスはちょうど復興景気に沸いていた。1915(大正4)年には、Panama-Pacific Exposition(パナマ太平洋万国博覧会)が開催され、その復興を世界に誇示した(伊藤真実子2007)。

北村はLos Angeles Business Collegeに入学する傍ら、当時のハガキをみると、I hope you will success on your business this year 1913. とあり、businessにも精を出していたことがわかる(図37-6)。具体的な仕事の中身は不明であるが、ロサンゼルス市内を



図1 北村千代治 (1915.2.5. 24歳)

転々としながら、学業に仕事に励んでいた。彼を支えていたのは、日本人移民たちで、ハガキにはM.Kimura、T.Miura、R.Endoと記され、何人もの日本人にたどり着く。R.Endoは会期中1900万人もが訪れたと言われる

World's Panama-Pacific Exposition in Sanfrancisco 記念スタンプが押されたハガキ(図37-7)を千代治に送っている。

北村は1916(大正5)年6月12日にLos Angeles Business Collegeを卒業する。同17日にはButler's glove(執事の手袋)の特許(資料37-1)が出願されており、こうしたbusinessに関わる書類作成を学んだものと見られる。7月1日にはJapanese American Farmers' Association(日加農業組合)に就職し、secretary(事務)として勤務した。10月16日にはAmerican Penman Branch School(アメリカ書家学校分校)から修了証が授与されている。1917(大正6)年1月には『英語世界』2月号に「アーム・ムーヴメント」(北村千代治1917)の一文を寄せている(図37-3)。

1916(大正7)年には結婚のため、日本に一時帰国する。当時、「写真花嫁」という制度<sup>1)</sup>があり、渡航費用と手間を省くために、1枚の写真だけをたよりに2万人以上の女性が海を渡ったとされている。千代治はこうした制度にはよらず、結婚のために帰郷し、3月6日には中目博記氏夫妻の媒酌により、守屋ちよと結婚(図2)した。3月11日まで郷里に滞在し、17日には天洋丸で再び日本を後にした。



結婚を知らせる Post Card

図2 北村千代治・ちよ (1917年3月6日撮影 26歳)



図3 自動車の北村千代治 (1920年代?撮影)

1919年9月には、北村は日加農業組合を辞め、American Realty Co. (アメリカ不動産社)に転職している。アメリカは第1次世界大戦後、戦勝国として黄金時代にはいり、大量生産と大量消費、モータリゼーションが一気に加速した。北村はこうした未曾有の好景気のなかで転職を果たした。北村が自動車に乗る姿の写真(図3)はこの頃のものだったと思われる。実際の仕事は、現地不動産事務所のInterpreter(通訳)と記されており、日本人移民の土地取引に関わるものだったとみられる。

ところが、1920年にはこれまで抜け穴だらけだったカリフォルニア州外国人土地法が大幅に改正され、10月には北村の不動産事務所も閉鎖に追い込まれた(closed October 1920 on account of Alien Land Law)。以後、日本に帰国するまで、青果卸の仕事をしている。北村がのちに、カリフォルニアのオレンジ農場で働いていたという家族の伝えは、この苦難の時代を指しているものであろう。1921年7月にはカリフォルニア州ターロックの果樹園から白人自警団が日本人を貨車に積み込み強制追放する事件が起きた。

1922年にアメリカ最高裁は日本人への市民権授与の禁止は合法とする判断を下し、1924年にはアメリカ議会が民法改正を可決し、日本からの移民は事実上全面禁止となり、日本人に対する風当たり



図4 帰国 (1925年)

はますます強いものとなっていった。

北村は1924年12月、青果卸の仕事もやめ、翌25(大正14)年3月8日に、長男仁の小学校入学に合せ<sup>2)</sup>、日本へと帰国する。

### Ⅲ 東北帝國大學時代

#### (1) カリフォルニアから帰って

1925年に日本に帰国した北村は、仙台で商売を始めた。その時の名刺(図38-1)が残っており、「米国インスタントフリザア株式会社 東洋総代理店 米独商会主 仮事務所 仙台市北五番丁194」と記されている。インスタントフリザアとは冷蔵庫のことで、日本では1923(大正12)年に三井物産がアメリカGE社から輸入したものが最初で、1930(昭和5)年に芝浦製作所が国産第1号を開発したとされ、それまで冷蔵庫は米国製品の輸入業者によってまかなわれていた。当時の冷蔵庫の価格は小さな家一軒分といわれるほどの高額商品で、購入者は上流階級や高級レストラン、醸造所などごく限られたものであった。名刺の裏面には「American Realty Company 304 Wholesale Terminal Bldg. Los Angeles」と記されており、アメリカ不動産社とも何らかのつながりを保っていたことがうかがわれる。

このころの手紙の類では、冷蔵庫未着の詫び状(Stover Signal Engineering社)やミネラル・ウォーターの納品書(Piggly Wiggly社)等があり、冷蔵庫だけではなく、ミネラル・ウォーター等の関連商品の販売にも力を注いでいた。1926(昭和1)年11月21日の顧客帳簿(図38-2)を見る限り、商売は順調だったようである。自宅を兼ねた総代理店建設に当たっての費用も残されており、Carpenter(大工)4274.80円、Real Estate(不動産)7106.25円、内装ほか総計12430.59円の仙台では初めてというアメリカ風の瀟洒な洋館を構えた。こうした商売は成功を収め、北村は仙台商工界のなかでもひとかどの人物として頭角を表していくことになった。

1929(昭和4)年11月1日からは仙台高等工業学校同窓会事務局から雇用(Appointed Secretary of the Alumni Club of Sendai Technical College)され

た。就職の経緯は不明であるが、採用が同窓会事務局であり、北村と同じように海外移民となった卒業生や現地日本人会との連絡調整が主な仕事だったものと思われる。英訳に関わる仕事(図38-4)も担っていたようである。

## (2) 東北帝國大學時代

北村の履歴書には「two years after, served in the Institute of Geology and Palaeontology of Tohoku Imperial University and also studied Archaeology.」(2年後に東北帝國大學地質学古生物学に勤務し、考古学を学んだ)とある。具体的に何月から大學に勤務するようになったのかは不明である。「昭和の初年になると、新たに標本を維持管理する形ができて北村千代治、…石工手には木村毅三郎、…という常時三名構成となり、…」(東北大学百年史編集委員会2005)とあり、教室の研究活動を支える技官、事務系職員として勤務した。

当初、東北帝國大學地質学古生物学教室で行っていた標本の維持管理が主な仕事だったらしく、手書きの資料カード(図38-5左)が残されている。英習字師範を取得した北村らしい流麗な筆致で、



図5 北村千代治(1936年2月22日撮影 45歳)

「No.8454 *Atrypa reticularis* var. *richthofeni* Loc. 支那四川省保寧府昭化縣三磊堤ノ南」と記されている。書き損じるか、何かしたものらしく、資料(化石)・実際のカードは東北大学総合学術博物館に残されている。後に女性タイピストが正式に雇用されるが、タイピングのみならず英文点検等の補助的業務までを担っていたらしく(図38-5右)、家族の伝えでは本多光太郎東北帝國大學総長(1931-1940)の英文まで手がけたという。

北村が東北帝國大學地質学古生物学教室に勤務し出した1930(昭和5)年には、教室から松本彦七郎教授のまとめた報告が出版されている。6月28日に『東北帝國大學理學部地質学古生物学教室邦文報告 第8号 陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告附図』・『東北帝國大學理學部地質学古生物学教室邦文報告 第9号 陸前国登米郡南方村青島介塚調査報告 陸前国名取郡及磐城国亘理郡の石器時代後期及至前後遺蹟 陸前平野区域の古墳』が刊行されている。さらに、松本がこれまで収集した自然遺物をまとめた『The Science Reports of the Tôhoku Imperial University. II nd Ser. (Geology)』Vol. X IIIが出版されている。北村がこれらの仕事に関わったのか、否かは定かではないが、北村自身の履歴書には「also studied Archaeology」と記されており、松本彦七郎から直接、考古学を学んだものとみられる。松本は1933(昭和8)年休職、35(昭和10)年には退職(松本子良2003)し、松本の休職以後は、後に副手となる鹿間時夫<sup>3)</sup>が古生物学分野、北村千代治が考古学分野を事実上、引き継いだものとみられる。

## (3) 北村千代治コレクションから

### ①宮城県高松貝塚

宮城県桃生郡小野村(東松島市)高松に所在する。松本彦七郎が1922(大正11)年春に発掘調査し、北村が就職した1930(昭和5)年に刊行された報告書附図収録の川下り響介塚のちょうど川向かいに位置している。調査はこのころと思われ、遺物カードには、「小野村高松堤防南人骨発掘附近(八幡一郎氏?)」とあり、東京帝國大學八幡一郎氏?が人骨

を発掘した地点付近の調査(図6)で、松本彦七郎が北村を随伴して行った資料のようである。C地点とD地点に分けて資料収集されているが、A・B地点については不明である。

C地点出土の図6-1は繊維土器で、当時の最古の土器(山内清男1929)である。以後、1931(昭和6)年から1933(昭和8)年にかけて、山内清男が小規模ながら毎年発掘調査している(相原淳一2015)。

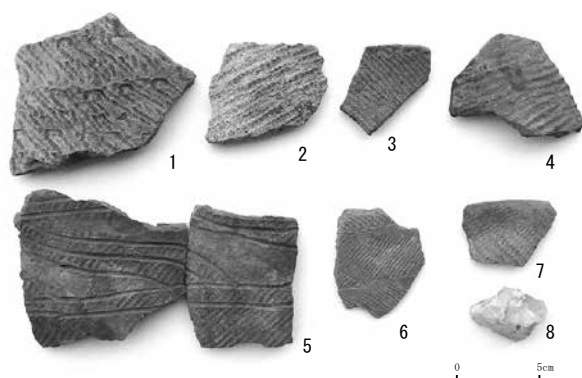
## ②福島県新地貝塚

福島県小川町新地貝塚が、学界に報告されたのは早く1890(明治23)年で、若林勝邦によって東京人類学会雑誌に掲載されたのが始めである(若林勝邦1890)。1924(大正13)年には福島県が史蹟調査事業として、東京帝国大学人類学教室の八幡一郎、松村瞭、山内清男が発掘調査を行っている(山内清男1924・1964)。調査の帰途、東北帝国大学の松本彦七郎のもとを訪れている。

1932年4月28日・5月28日の二度、貝塚に足を運び、土錘2点を採集している(図7)。

## ③三陸地方

1933(昭和8)年3月3日には昭和三陸津波が起き、地理学教室の田中館秀三あるいはその薫陶を受けた山口彌一郎(山口彌一郎1943)をはじめ、地質学古生物学教室も現地調査に入っており(伊藤大介2014)、そうした折の調査に伴うものと思われるが、



1 高松堤防南 C 2 C 3 C 4 C  
5 高松堤防北 D 6 C 7 C 8 (地点不明)



図6 高松貝塚資料

詳細は不明である。

資料は松本彦七郎退職後の1937(昭和12)年のものである。

北村の回想(北村千代治1944)によると、



図7 新地貝塚資料

「当時鹿間先生の指導」を受け、遺跡発掘の毎に魚骨や鳥骨の重要性を痛感したとしており、鹿間時夫とともに行った調査の可能性もあろう。

## A. 女神洞穴

松本彦七郎が1922年7月に哺乳類遺骨調査のために岩手県師範学校の鳥羽源蔵の案内により、気仙郡上有住村(住田町)蛇王洞洞窟を訪れ、縄文時代屈葬人骨を調査(松本彦七郎1927)している。松本の調査は内務省史跡考査員の柴田常恵の注目するところとなり、遺跡指定候補地選定のため1923年8月24日には蛇王洞洞窟、26日には矢作村(陸前高田市)女神洞窟、29日には日頃市村(大船市)関谷洞窟の調査に訪れている。1925年8月21日には、東京帝国大学小金井良精・八幡一郎、東北帝国大学長谷部言人、大山 柏・廣瀬啓介、小田島禄郎らが訪れ、測量と発掘調査を行っている。

1937(昭和3)年の調査は記録には残されておらず、不詳である。朱書きのほかに、万年筆書きの「矢作村 御神1937」のラベルが一枚残されている。石器6点が採集されている(図8)。

## B. 蛸ノ浦貝塚

岩手県気仙郡赤崎村(大船渡市)に所在する。1924(大正13)年夏には、岩手県史跡調査員小田島禄郎が内務省考査員柴田常恵を史跡名勝天然記念物保存法に基づく史跡指定をめざして案内している。

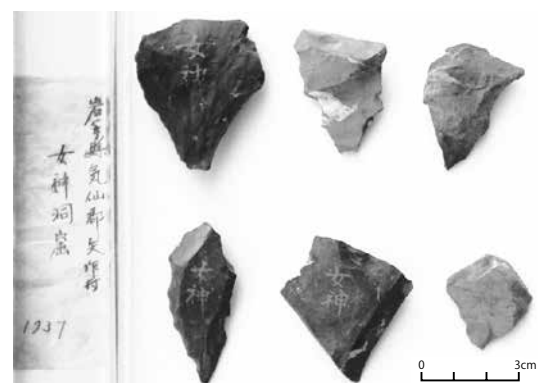
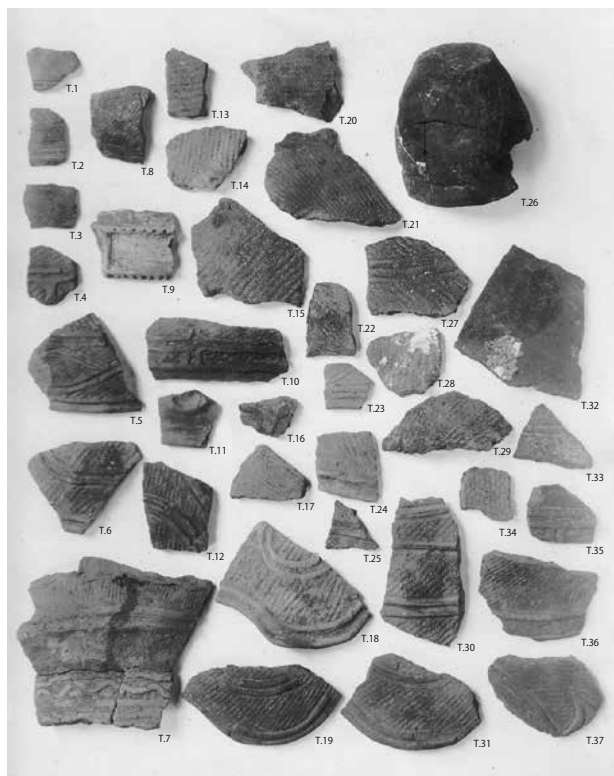


図8 女神洞窟資料

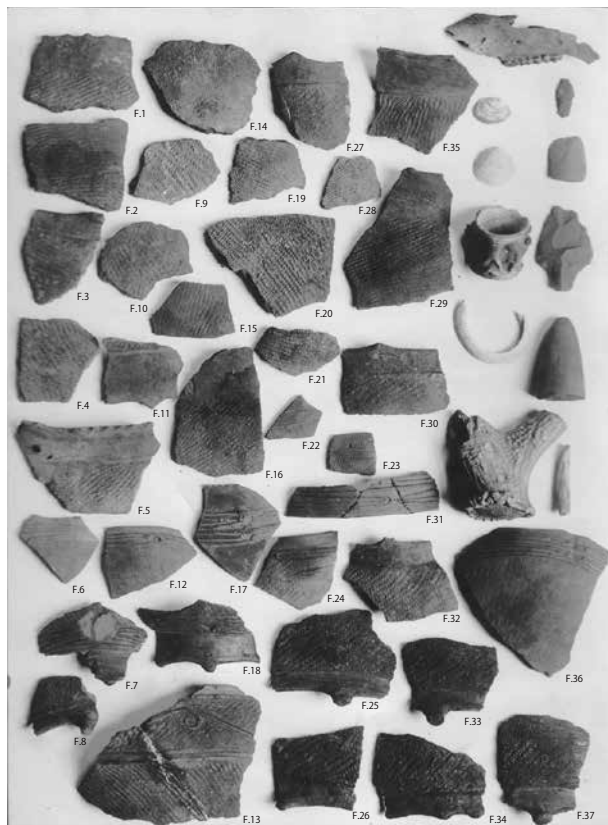


図9 蛸ノ浦貝塚石器



北村作成の版下写真図版のとおり

図10 蛸ノ浦貝塚土器



北村作成の版下写真図版のとおり

図11 下船渡貝塚土器



図12 樺太鈴谷貝塚石器

1934 (昭和9)年には史跡指定を受けている(岩手県教育委員会1998)。

1937 (昭和3)年の調査は記録には残されておらず、不詳である。蛸ノ浦貝塚については石器とガラス乾板・版下が残されている。印刷物として出版された可能性もあるものの、出版先は不明である。

北村らの資料をみる限り、いずれも破片資料であり、踏査による採集資料とみられる(図9・図10)。

### C. 下船渡貝塚

岩手県気仙郡赤崎村(大船渡市)に所在する。蛸ノ浦貝塚と同じく、1924(大正13)年夏には、小田島祿郎が柴田常恵を案内している。1934(昭和9)

年には史跡指定を受けている。

1937(昭和3)年の調査は記録には残されていない。下船渡貝塚についてもガラス乾板・版下が残されている(図11)。

### ④ 樺太鈴谷貝塚

石器に朱墨で「鈴谷1937」とあり、付札には「樺太鈴谷貝塚 鹿間時夫氏ヨリ」とあり、鹿間時夫から譲り受けた資料であることがわかる(図12)。

樺太の考古学的な調査は東北帝國大學法文学部の伊東信雄が1933・34(昭和8・9)年に行った調査が著名であり、鈴谷貝塚は樺太を代表する貝塚(伊東信雄1935)として知られていた。

### ③加美郡鳴瀬村下新田下宿遺跡

北村千代治が発掘調査を行い、報告している唯一の遺跡である(北村千代治1938)。

1938(昭和13)年5月29日に鳴瀬町長から耕地整理中に土器が出土したという報告がはいり、「自ら現場を掘り左記掲載土器を発掘せり。」

「現場は下宿輪谷下旧鳴瀬川北沿岸村社の西方約500米、鳴瀬村字四日市場と下新田境にして、堤防より船渡場(昭和十三年五月建設道路)へ向って約百米南方左側<sup>ほうがん</sup>抱含面積一ヘクトアール」と記しているが、現在北村が記した地名は残っておらず、かろうじて残されている「輪谷」の地名とかつて村社だった<sup>うきす</sup>宇岐須神社、下新田と四日市場の大字境との位置関係から図13の丸印付近が遺跡の位置と考えられ



国土地理院地図から作製

図13 下新田下宿遺跡の位置

器 土 土 出



図14 下新田下宿遺跡出土遺物(北村1938)より

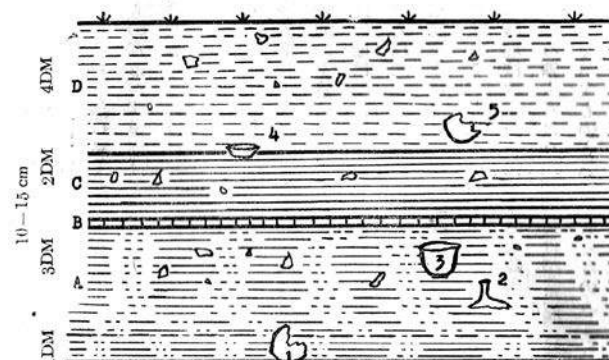


図15 下新田下宿遺跡断面(北村1938)より

る。北西側の自然堤防上には<sup>もとじゆく</sup>元宿遺跡(宮城県遺跡番号:28013)が広がっている。

北村は次に「沖積層の分層」、「出土土器」について述べ、「記載土器を各A、B、C、D分層中に抱包するは土器の進歩発達を示すものと思せらるのみならず、各年代的に出土せるはもっとも珍しく研究上貴重なるものと思はる。」と結んでいる。出土土器の特徴を述べ、その違いを分層成果に基づく新旧関係に根拠を求める方法論は、まさしく松本彦七郎が里浜貝塚(松本彦七郎1919b・c)や宝ヶ峯遺跡(松本彦七郎1919a)で実践した「分層的発掘」にほかならない。

なお、この論文は東北帝國大學地質学古生物学教室から後に斎藤報恩会博物館学芸員になった野村<sup>しちへい</sup>七平の紹介によって掲載されている。

### ⑤宮城県大木囲貝塚

宮城郡七ヶ浜村(七ヶ浜町)<sup>とうくうはまだいぎ</sup>東宮浜大木に所在する。朱墨で「多賀城村 代木貝塚」となっているもののほかに、単に「大木」と記されているものがあり、何度か足を運んでいる可能性もある。土器には「代木 21.9.13」の記載が入っており、1921.9.13あるいは1913.9.21の可能性が当初考えられた。1913年も21年も北村はカリフォルニアにおり、異なる。昭和21年9月13日と昭和13年9月21日では、21年9月は北村が満洲から引き揚げて一月しか経過しておらず、この時期に発掘調査をしたとは考えられず、可能性が最も高いのが昭和13年9月21日である。

大木囲貝塚調査を最初に行ったのは1917(大正6)年6月の松本彦七郎が最初である。松本はこの年の4月に岩手県<sup>うそざわ</sup>瀬澤貝塚の調査を行い、続いてこの大木囲貝塚の調査を行っている。こうした調査成果に基づいて、縄文時代を三期(第1期:大木式、第2期:瀬澤式、第3期:宮戸式)に区分している(松本彦七郎1919a)。松本はここで「土器の全体を総合的に見た上での個々の遺跡又は遺跡の個々の層位に就ての型式である。古生物学的層位学的の時代別又は型式別と違って戴きたい。」と、これまでの型式概念とは方法的に異なることを述べ、やがてこの方法論は山内清男へと引き継がれ、現代考古学の



図16 大木田貝塚出土遺物



図17 里浜貝塚発掘調査記事

基盤を形成するに至る記念碑的調査となっている。1927(昭和2)年7月には山内清男が大木田貝塚A地点の発掘調査を行い、1929(昭和4)年まで断続的に調査を行っている。このほか、1918年に長谷部言人(長谷部言人1919)、1925年に清野謙次(清野謙二1925)、1928年には北村とも親交のあった村主岩吉<sup>4)</sup>の調査が行われている(村主岩吉1928)。

北村の行った調査(図16)では、縄文前期末葉大木6式・中期初頭大木7a式の土器、及び石鏃<sup>せきぞく</sup>ほか石器類11点、骨角器1点が得られている。

⑥宮城県里浜貝塚

1939(昭和14)年8月26日の河北新報に発掘調査の記事が掲載されている(図17)。それによると、調査は8月8日～17日まで、斎藤報恩会博物館の野村、村主氏等は東北大理学部地質古生物学教室の北村、曾根氏等の協力を得て、…松島湾宮戸島の大規模な発掘調査を行ひ、地質学上ならびに考古学上全国学界に貢献する多大の収穫をあげ、その発掘物全部をこの斎藤報恩会博物館に運搬整理にとりかかった。」とあり、発掘調査主体は斎藤報恩会博物館、調査担当が野村七平・村主岩吉、調査協力が東北帝國大學理学部地質学古生物学教室北村千代治・曾根<sup>ひろし</sup>廣であることが分かる。調査資料はすべて斎藤報恩会に運ばれており、北村のもとに残されたのは若干の資料のみである(図19・20)。

今回の寄贈資料中には、1938(昭和13)年8月10日から1939(昭和14)年11月19日に至る野帳をはじめとする当時の記録類も一部含まれていた。宮戸島貝塚に関しては、地図とSummary草稿、野帳には調査地点(図27-2)が記されていた。

The stone age Site at Island of Miyato, Rikuzen.

The Shell mounds of the dwelling sites discovered under the shell layer of the mounds of Sato Hama by \_\_\_\_\_ J.C.Kitamura, under the direction by Dr.Nomura,Saito HoonKai Museum.

Summary

The Shell mounds of Sato-hama and its nearby mounds are situated at the Island of Miyato,Rikuzen, where is located the North-East



of Matsushima Bay ( $38^{\circ} 20'$ ), would rather say Miyato peninsula of Matsushima at the present time. One of the mounds lies edges of the cliff, the North-East of Sato hama where stands 10meters above the sea-level and the height of shell mound 5meters from the foot. (Pl. )

The area of the mounds is about 1 acre or more, its shape is oblongated along cliff, where had been sea coast and the greater parts of the mound is now cultivated, and that those exposed shells is in safe on favour of Institution of the Palaeontology, Tohoku Imp,U.

Other shell mounds is situated at about 400 meters distance, S.E of Sato-hama, lie on south side of the D.P. 10-25 meter hill side and its area is about 7218 square meter, oblonged shape. In 1912,Excavation was made first [ by \_\_\_\_\_ ] and investigated. On the contrary, the later mounds none had taken investigation might had been down by some manure but no record.

In this, On August, 1939 Dr. Nomura, Saitou Hoon Kai, the leader of the parties excavated and found remains, and wonderful stencils of our forefathers, etc. in the shell layers and a fire place in beach sands layer that is covered the weathered cliff which is of Miocene Tuff. at Satohama, at Kazakoshi & Dai spots found out countless fragments of pots, antler, 4 bone, stone implements in the shell layers.

#### 陸前宮戸島における石器時代遺跡

集落遺跡の貝塚は斎藤報恩会博物館の野村七平博士の指示のもと、\_\_\_\_\_北村千代治によって里浜貝塚の貝層下から発見された。

#### 【要旨】

里浜貝塚とその近接する小丘は陸前宮戸島に位置している。宮戸島は松島湾北西部（北緯 $38^{\circ} 20'$ ）にあり、現在ではむしろ松島湾における宮戸半島と呼んだ方がいいかもしれない。小丘のひとつが崖際にあり、里浜の北東部は海水準10m以上に立地し、

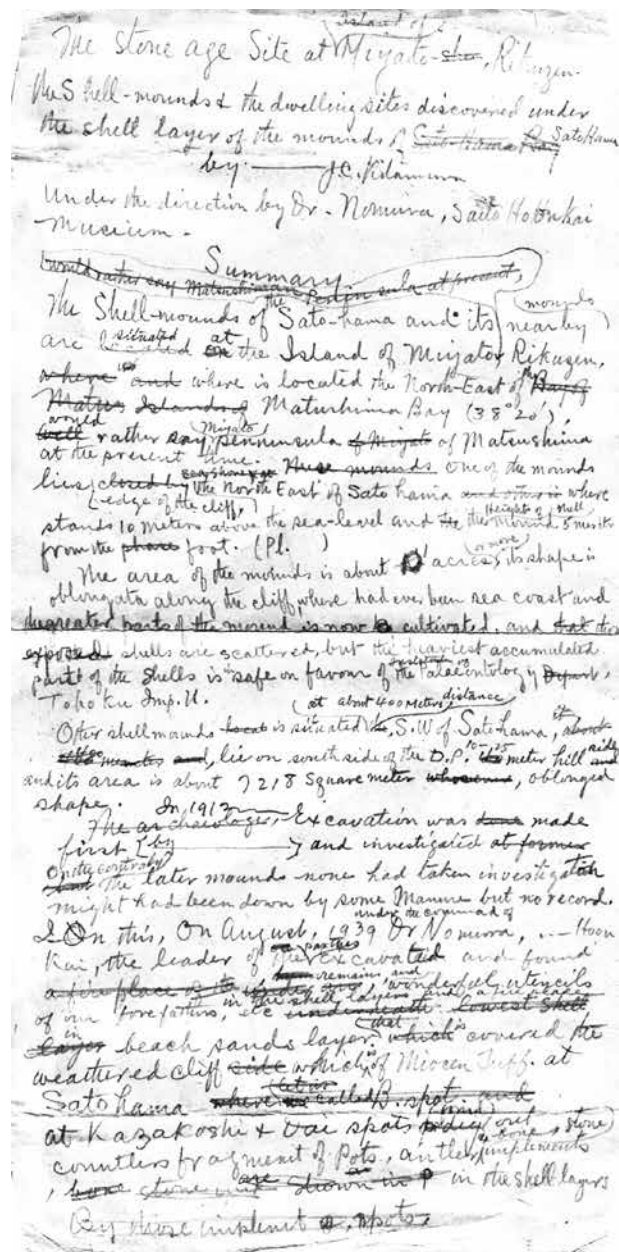


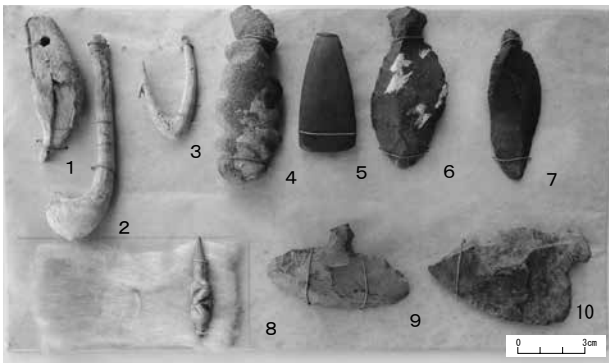
図18 里浜貝塚発掘調査Summary草稿

貝塚の高度は現在地から比高5mである(Pl. )。

貝塚の範囲は約1エーカー以上あり、その形状は崖に沿って長くなり、かつては海浜だったし、貝塚のより大きな部分が現在耕作され、露出した貝が散らばっているが、最も厚く堆積する貝層部分は東北帝國大学古生物学教室が有益な調査を行っている。

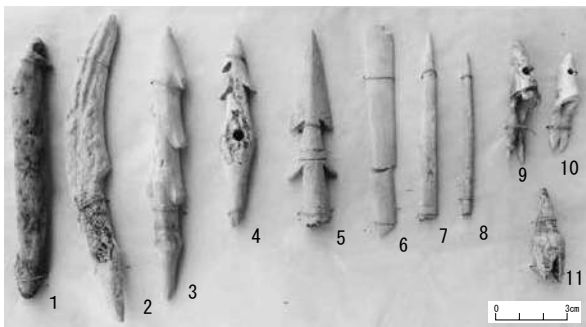
別地点の貝塚が約400m離れて、里浜南西地点、D.P. の南側、10 - 25m丘陵側にある。その範囲は約7,218㎡、細長い形状をしている。

1912年に、発掘調査は[ \_\_\_\_\_ ]によって]はじめて行われ、調査研究された。それに反して、後者の貝塚の調査研究は全く行われておらず、肥料にされ



1:風越 2:大木 3:台ノ下 4:風越 6:風越 9:風越 10:賀美石木輪医院

図19 北村収集骨角器(1)ほか



2:里浜 5:カワ森 6:大木 10:里浜

図20 北村収集骨角器(2)

たようであり、記録は残されていない。

1939年8月、現今、斎藤報恩会の調査隊指導者、野村博士の指示により発掘し、遺構と貝層及び海砂層中の炉の中からは祖先の素晴らしい遺物他を発見した。それは中新世凝灰岩からなる風化した崖錐堆積物によって覆われていた。里浜貝塚、風越地点・台地点で、貝層中から数え切れない土器片、角製、骨製(4点)、石製道具を発見した。

北村資料には里浜あるいは里と注記されたものと風越(里浜貝塚風越地点)と注記されたものがある。

図19-1は、風越地点出土の長さ60mm、幅21mmの歯牙穿孔垂飾品(ツキノワグマ上顎右犬歯)である。4・6・9は風越地点出土の石器である。図20-2は里浜貝塚出土の長さ124mm、幅17mmの鉤先である。10は里浜出土の燕形銚頭である。

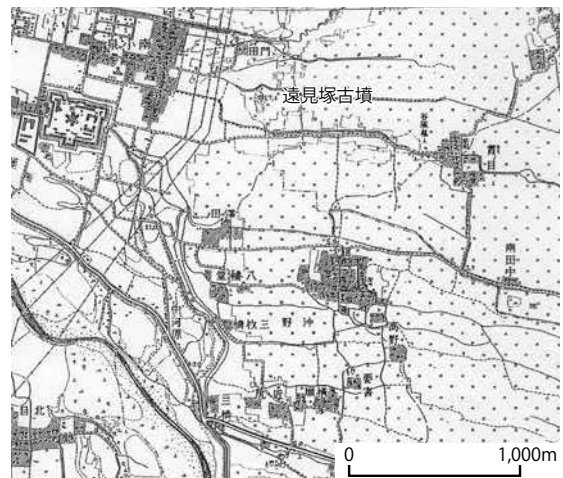


図21 角偶

図21は出土地不明の鹿角製角偶である。残存長26mm、残存幅20mm、厚さ6mmである。明瞭な顔面表現が施されている。背面は粗面となっている。

### ⑦宮城県南小泉遺跡

遺跡は仙台市郊外の七郷村(現在仙台市若林区)南小泉に所在する。遠見塚古墳の隣接地で、1929(昭和4)年ごろから松本源吉の注目するところとなり、畑の深掘りの際に出土する遺物が収集されていた(松本源吉1939)。逋信省が速達郵便物の航空輸送を図るため、1932(昭和7)年12月に飛行場建設を開始し、33(昭和8)年3月には竣工した。その後も東北の拠点空港として整備拡張工事が行われることになり、39(昭和14)年からは、松本源吉が立入許可証を取得して遺物の採集に努め(石黒伸一郎2006)、5月11日には東北帝國大學国史研究室に連絡を入れている(図25-1)。新聞記事によれば、法文学部奥羽史料調査室で発掘調査を行うことになった旨が記載されている。遺物が大量に出土することから、斎藤報恩会博物館でも注目するところとなり、6月10日には同館片倉信光・野村七平・村主岩吉らと面談し、以後斎藤報恩会博物館の調査は2



①1933(昭和8)年修正図 大日本帝國陸地測量部



②1946(昭和21)年修正図 地理測量所

図22 仙台飛行場(南小泉遺跡)

年間ほど続いたと見られている(石黒伸一郎2006)。その報告は村主によって1943(昭和18)年行われている(村主岩吉1943)。また、植物遺体については同年東北帝国大學地質学古生物学教室出身の奥津春<sup>はる</sup>生によって報告されている(奥津春生1943)<sup>5)</sup>。両報告ともに、北村に対して謝辞が述べられており、北村の元に残された資料は、伊東信雄ら法文学部奥羽史料調査室とは別に、斎藤報恩会-東北帝国大學地質学古生物学教室が関与した調査によるものとみ

られる。ただし、1939(昭和14)年に行われた斎藤報恩会が調査主体の里浜貝塚の調査同様、教室による正規の調査ではなく、個人の立場による調査協力という形をとったようである。

北村のもとに残された調査平面図(1:1,000)(工事主任伊藤蔵六氏から)には10mメッシュの調査グリッドが組まれ、グリッド内小丸印が鉛筆で記入されており、遺構あるいは遺物の出土地点を記した分布図(図23)と見られる。一箇所だけ鉛筆書きで伊

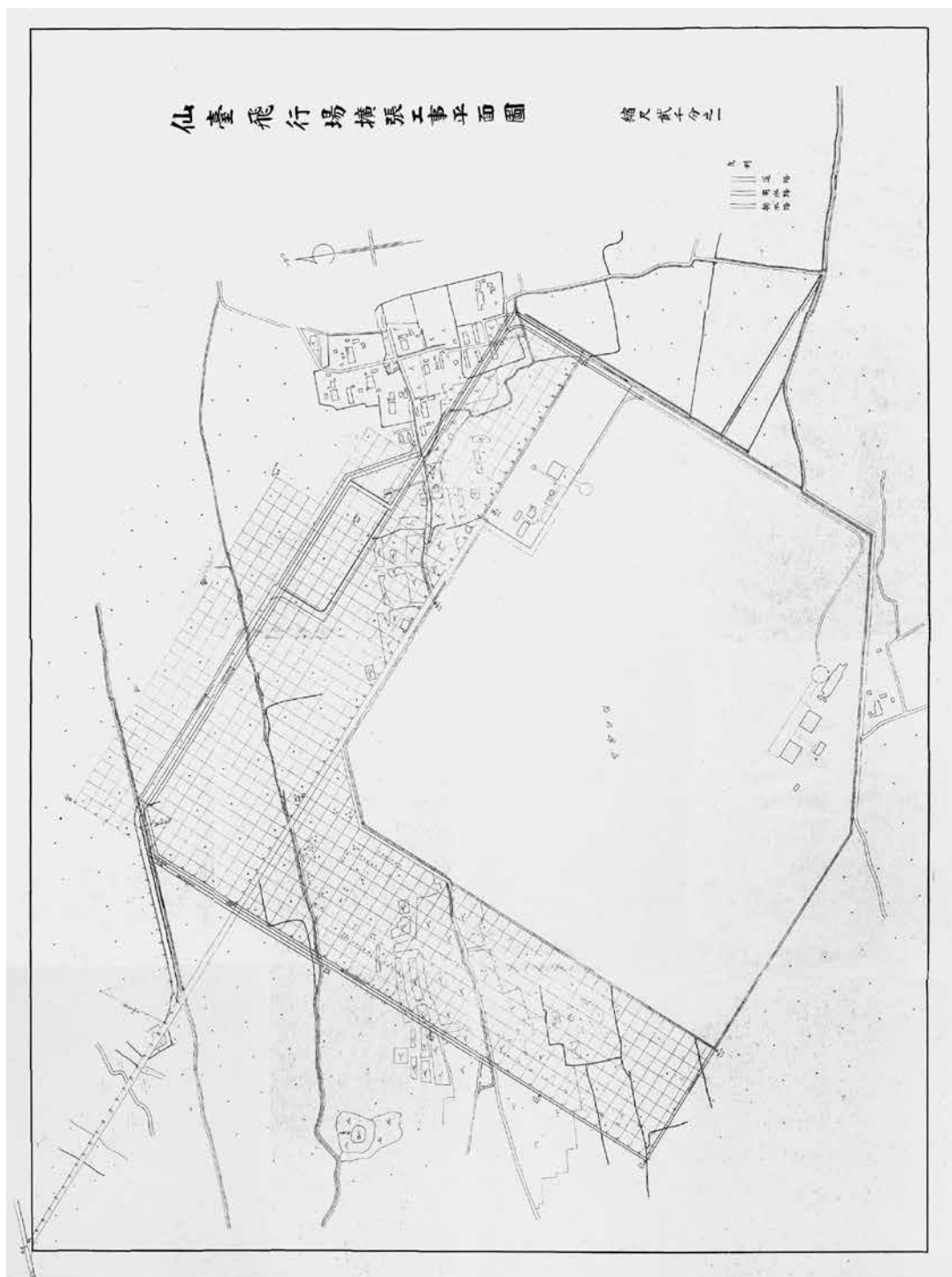


図23 仙台飛行場調査平面図

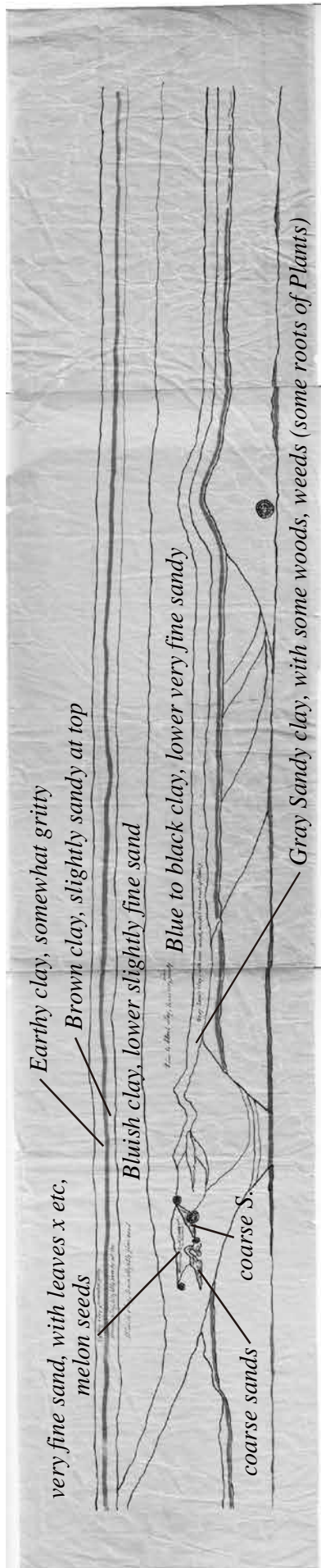


図24 北村千代治仙台飛行場土層断面図

藤氏と記されており、これは同じころ調査をしていた伊東信雄の伊東の誤記であろう。また、今回寄贈された資料の中には調査日誌が記された野帳があり、図28に一部収録した。清書され、英語で説明の付された土層断面図も一枚発見されている(図24)。図の作成箇所については平面図に記されてはおらず、不明である。奥津自身が「植物遺体発掘地点での遺物包含地層の累積状態ならびに遺物、遺体の算出状態は、北村千代治氏により詳細に調査されている」(奥津春生1943)と高く評価しているとおおり、土層と遺構、植物遺体が克明に記されている。遺構(溝?)の堆積層と見られる箇所には、下部に材と粗粒砂、その上位に葉とウリの種実混じりの微粒砂と記されている。奥津の調査所見でも「マクワウリ」が検出されており、北村の高い問題意識がうかがわれる。南小泉遺跡収集資料(図26)は北村コレクションの中でも大半をしめるものである。遺物には「仙飛」「仙ヒ」「霞目」「カスミ目」等と注記が行われているものがあり、そのほとんどはこの時期に採集されたものと考えられる。ただし、調査年月日については記載がなく、北村の場合、後述するように戦後進駐軍顧問兼通訳として、軍人考古学者のMacCord<sup>6)</sup>と行動をともにしており、戦後に収集したものも含まれている可能性も否定できず、収集時期については特定できない。

北村コレクションの考古系資料は、北村宅2階自室の壁付けの棚に収納されていた。完形ないしは完形に近いものは棚に直接置かれ、破片資料は標本箱と思われる小木箱に大半は納められていた(表4)。



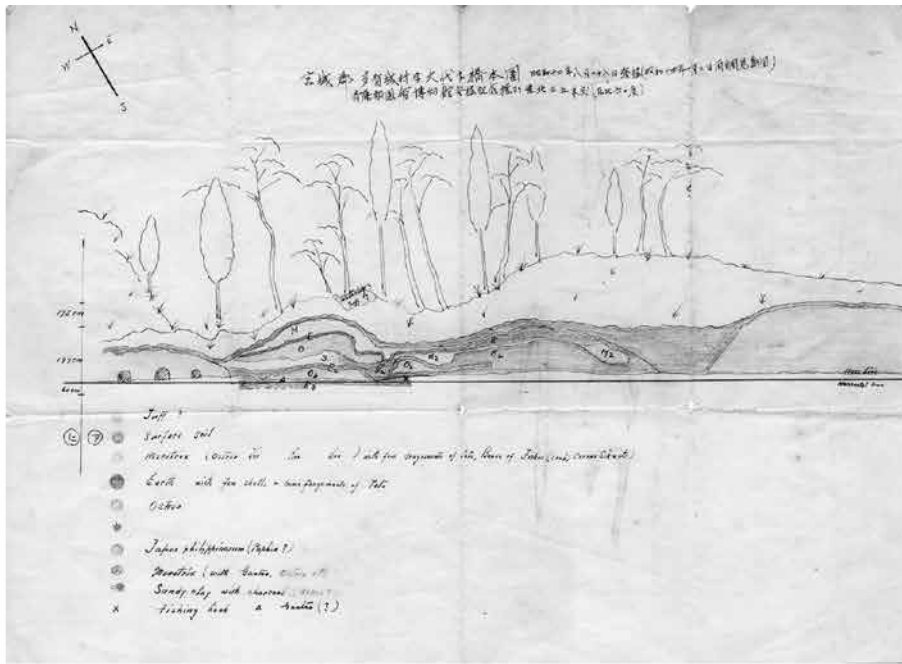
1 河北新報  
1939(昭和14)年5月28日

3 河北新報1940(昭和15)年3月3日

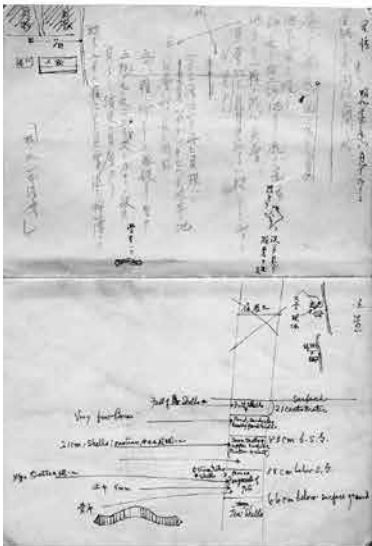
図25 仙台飛行場から遺物の出土を伝える新聞記事



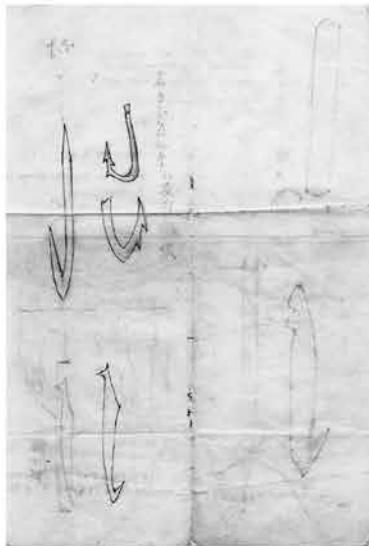
图26 北村收集南小泉遺跡



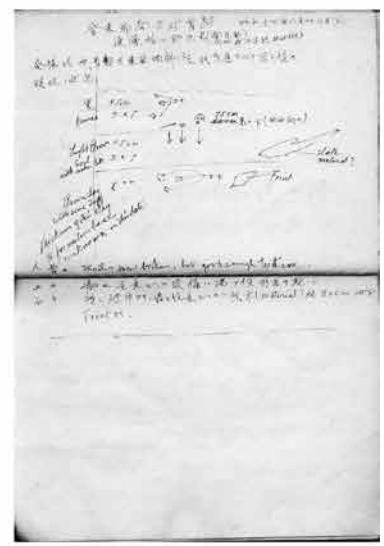
1 橋本田貝塚 (1937.8.28)



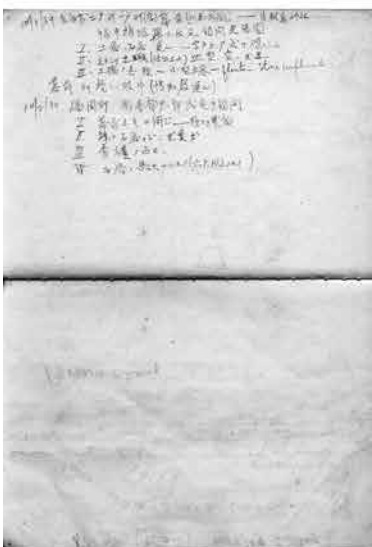
2 里浜貝塚調査日誌 (1938.8.22)



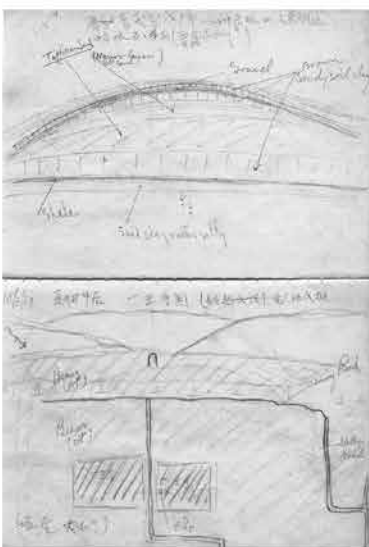
3 実測図 (里浜貝塚・瀬沢貝塚)



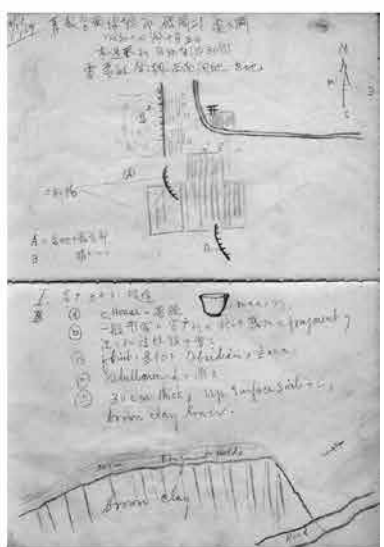
4 南方村青島貝塚 (1939.8.26)



5 岩手県資料調査 (1939.10.1・2)

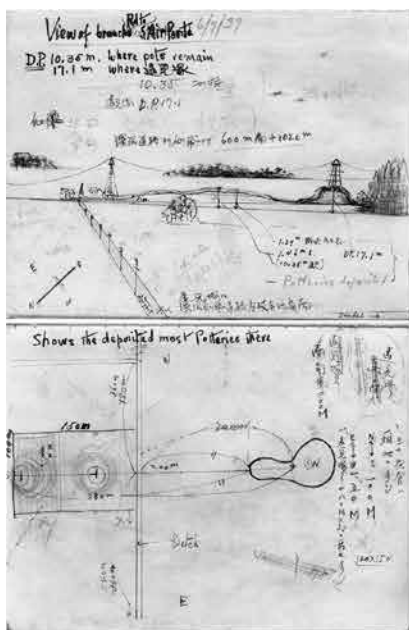


6 是川中居遺跡調査 (1939.10.3)

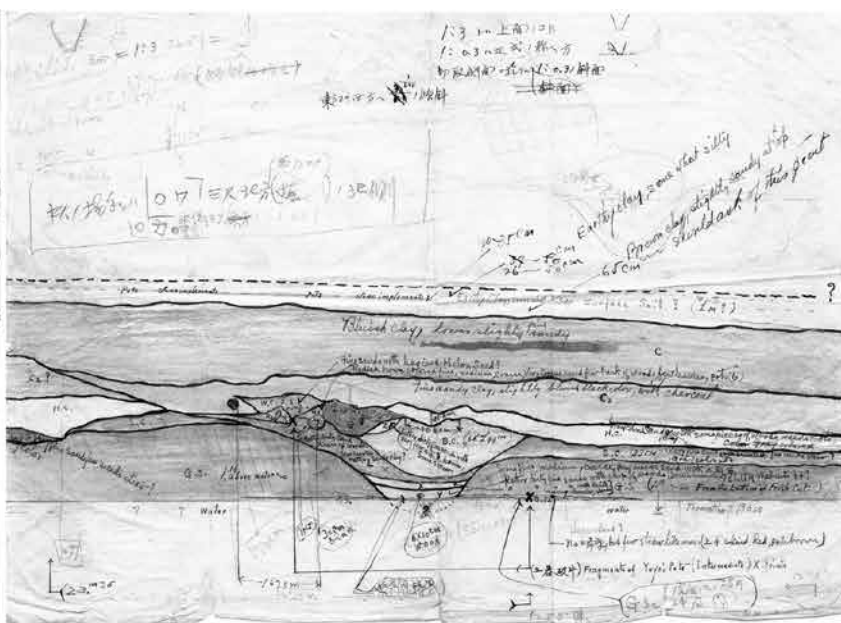


7 亀ヶ岡遺跡調査 (1939.10.5)

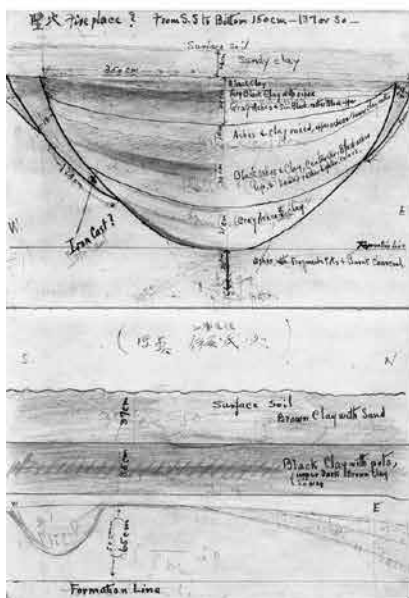
図27 北村千代治調査ノート(1)



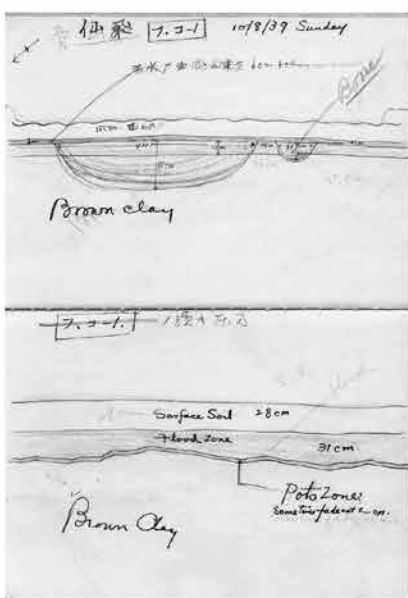
1 南小泉遺跡遠景 (1939.6.7)



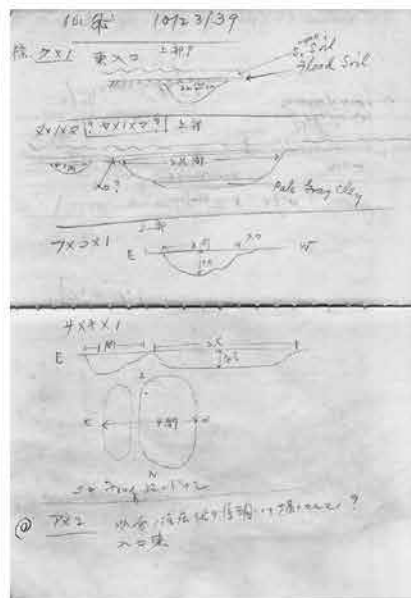
2 南小泉遺跡断面図原因



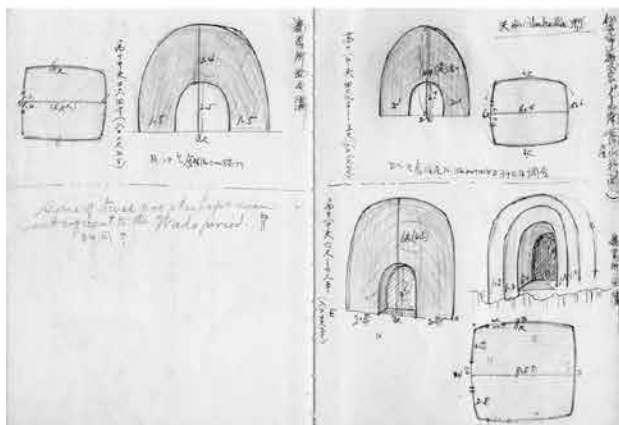
3 南小泉遺跡断面図



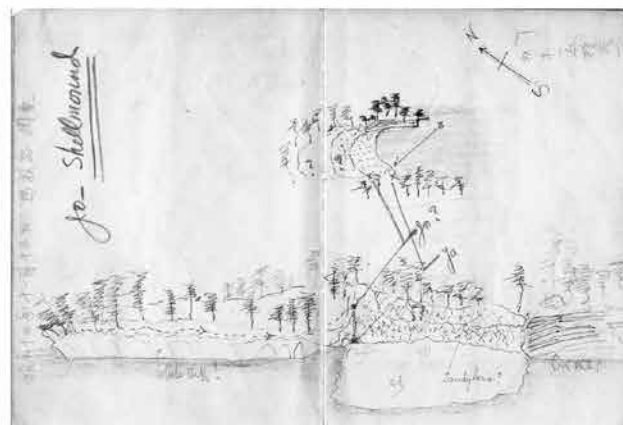
4 南小泉遺跡土壌 (1939.10.8)



5 南小泉遺跡土壌 (1939.10.23)



6 愛宕山横穴墓調査 (1939ころ)



7 馬放島貝塚 (1938.11.13)

Some of these are perhaps even subsequent to the Wado period. 和同?

図28 北村千代治調査ノート(2)

小木箱以外では、化粧箱や通常の木箱ほかに納められた資料もある。この小木箱に納められた資料が斎藤報恩会調査によるものらしく、その他の雑多な箱に納められたものは戦後の収集資料らしい。北村コレクション中、「昭三一.五.一七」と注記されたものが最も新しく、人から譲り受けた資料も含まれている。

北村の収集した資料は古墳時代の土師器や須恵器、管玉<sup>くだたま</sup>、弥生土器、石器などがある。特に須恵器には5世紀代(図26-1~3)のものが含まれ、宮城県のみならず、東北地方でも希少なものである。

#### (4) 東北地方北部調査

北村は1939(昭和14)年10月1日~5日にかけて、資料と遺跡調査のために、岩手県・青森県を訪れている。

##### ①岩手県一戸町梅垣鼎三氏宅(図27-5)

幕前<sup>まくまえ</sup>(蒔前か)遺跡の遺物を調査する。特徴として3点を記している。I. 土器・石器を見る一宮戸上層式ヲ偲ハシム、II. 主として土瓶(注口土器)、皿型、壺、玉類、III. 土偶ノ各種一小型土器—flints-stone implements 午後は遺跡を踏査し、収集した土器は博物館に送っており、この出張は斎藤報恩会博物館からの出張の可能性が高い。また、土器型式として、「宮戸上層式」(松本彦七郎1919b・c)を用いている点も興味深い。

##### ②岩手県福岡町國香郁太郎氏宅(図27-5)

遺跡名は不詳である。特徴として4点を記している。I. 幕前土器ニ同ジ一きわめて豊富、II. 殊ニ石器ナド、玉類、III. 香炉ノ品々、IV. 石器ノ最大ナルモノ(六尺以上ノモノ)

##### ③青森県是川村中居一王寺遺跡(図27-6)

細越竜之助氏の畑を踏査している。メモには(塩釜大木?)と書かれている。最初に代木と書いて、大木と書き直しているのもわかる。久慈街道の道路法面(中居林)の露頭観察、午後4時から同市蒔田三千蔵氏収集の広口壺の観察・略測を行っている。

##### ④青森県館岡村亀ヶ岡遺跡(図27-7)

木造駅<sup>きづくり</sup>から自動車<sup>きづくり</sup>で移動し、遺跡の踏査を行っている。宮戸土器トノ相違として5点、指摘してい

る。イ. C.Houseニ茶碗ノ如キモノアリ、ロ. 一般形式ハ宮戸ヨリモ新シキ感アルモ fragmentary。洗フタル後比較ヲ要ス。ハ. flint、多いこと。Obsidianガ主ナルモ。ニ. shell moundニ非ズ。ホ. 30cm thick, up. surface soilなし。brown clay lower。

#### (5) 渡満まで

「満洲国」建国直後の1932(大同元)年3月に建国式典が執り行われ、国都は「新京」と定められた。奉天の満洲教育専門学校附設教育研究所教授遠藤隆次・野田光雄は新国家にふさわしい博物館建設を文教部次長に陳情を繰り返し、1938(康德13)年4月1日付で「満洲国」国立中央博物館建設の認可が降りた。奉天の満洲教育専門学校校舎が「満洲国」国立中央博物館設立準備処とされ、遠藤が自然科学部長、野田が地質科長に就任した。新京本館は自然科学博物館で動物・植物・地質・物理の四課、奉天分館は考古学、哈爾濱分館<sup>ハルビン</sup>は北満産野牛哺乳類・魚類・昆虫類などとした。

「第一に事務官を何処から連れてくるか、仙台の矢部先生にお願いしたら、教室図書室の司書北村千代治氏を御推薦頂いた。北村氏は私も学生時代からお世話になった方で、若い頃はアメリカで生活された苦勞人である。」(野田光雄1995)。

こうして北村の満洲赴任が決まった。

## IV 「満洲国」国立中央博物館時代

### (1) 「満洲国」国立中央博物館時代から帰国まで

北村千代治は、1940年7月から1944年11月まで、「満洲国」国立中央博物館において事務官および総務科長として活動した。「満洲国」国立中央博物館<sup>7)</sup>とは、自然科学系の新京本館と、人文科学系の奉天分館(1935年6月開館の国立博物館が改組)からなる博物館で、1939年1月1日に官制施行された。北村が勤務した新京本館は、官制施行当初、庁舎を持たず、「博物館エキステンション」と称した教育普及活動を展開した。翌1940年7月に開館した大経路展示場(いわゆる常設展示場)では、動物・地理・鉱物・地質・物理の5部門構成からなる展示を行っ



ていた。そして開館当初から、副館長の藤山一雄が民俗展示場の建設を企画・推進したが、未完成のまま1945年8月の「満洲国」終焉とともに新京本館は消滅した。

新京本館の学芸官には、遠藤隆次（地質・古生物学）・野田光雄（地質・地理学）や鹿間時夫（地質・古生物学）といった東北帝國大学関係者がいた。この「仙台コネクション」を通じて、東北帝國大学地質学教室に勤務していた北村に白羽の矢が立ち、「満洲国」へ招聘されたものと考えられる。

北村が就任した事務官は、「国立中央博物館官制」第2条によると、該館に1人だけ置かれた薦任官（日本の奏任官に相当）の官吏であり、第5条で「事務官ハ館長ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル」とされた。実際の活動は、事務打ち合わせのため奉天分館へ度々出張し、1941年3月20日～4月19日には、斎藤報恩博物館・函館住民民俗博物館・北大附属博物館視察のため仙台・岩手・函館・札幌へ出張し、1942年11月14日～21日には高句麗遺跡視察のため輯安へも出張している。1943年に総務科長に就任<sup>8)</sup>してからは資料収集や日本への資料貸与を担っていた。

そして、北村による唯一の寄稿文が、1944年4月刊行の『国立中央博物館時報』第22号、32・40頁に掲載された「鳥骨と飛行機」と題する記事である。ここでは、東北帝國大学地質学古生物学教室時代に



図29 「満洲国」国立中央博物館時代の北村千代治（1941年ころ）

考古学方面へ興味を持ったこと、鹿間時夫の指導を受け50を過ぎて鳥骨研究を始めたことなどを回顧したあと、「鳥骨が古代人の食料・気候等を知るよすがとも思ふたのでありますが、飛ぶと云ふことに総力を挙ぐべき時、翼から航空機を考案されしことなども考へ、一応鳥骨によりある方面を研究するのも無駄ではない様な気がするので、一筆を勞し具体的に相異を発表し航空界への何等かの示唆ともなれば幸甚と存ずる」と、自らの研究の意義について言及した。

1944年11月に「満洲国」国立中央博物館を離れた後、同年12月に「満洲国」文教部の官吏となった。

1945年8月18日、皇帝溥儀<sup>ふぎ</sup>が退位し「満洲国」は崩壊した。その後北村は、遼寧省南西部に位置するコロ島から、引揚船「高榮丸」で浦賀港へ上陸した。1946年8月18日のことであった。

## (2) 北村千代治の収集資料

北村は自らの考古学に対する関わりを1944年の回想（北村千代治1944）のなかで「道楽」と卑下し、さらに「然るに急に渡満致しましたので道楽は中止せざるを得ないようになりました。」と記している。北村の大学での仕事を考えるのであれば、考古学はあくまで道楽と位置づけるしかなかったのであろう。「満洲国」国立中央博物館にも、考古学担当には三宅宗悦<sup>みやけむねよし</sup><sup>9)</sup>以下の学芸官がおり（大出尚子2012）、北村は考古学を封印するしかなかった。

今回の寄贈資料の中には、満洲で収集したとみられる資料もわずかながら含まれていた。いずれも人から譲り受けるか、現地調査の折にたまたま採集したような資料である。

図30-1・2は名刺ケースと一緒に収められていた。

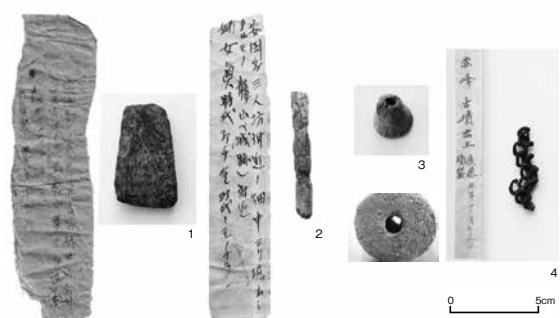


図30 北村の「満洲国」国立中央博物館時代の収集資料

1は小型の磨製石斧<sup>せきふ</sup>で付札には「満洲国間島省延吉縣龍井町郊外(西北方四キロ)馬鞍山麓ヨリ発掘ノモノ 昭和十二年六月ノ俄 於白頭山麓安圖縣□□□□□□□□□□」と記されている。昭和12年は北村は日本におり、人から譲り受けたものようである。付札の1・2行目と3行目以降では記載が異なり、4行目部分で破られており、判読できない。2は軟質の石製品で、管状に穿孔が施されている。付札には「安圖縣三人坊附近ノ畑中ヨリ掘出シタルモノ龍山(城跡)付近 □女眞時代即チ金時代ノモノナラン」と記されている。1の磨製石斧の3行目以下の文を白紙に清書し直したもののようである。3は小型の紡錘車<sup>ぼうすいしや</sup>で底面に朱墨で「間島省延吉縣龍井馬鞍山」と記されており、1と同じく馬鞍山出土のものである。4は青銅製品断片で付札に「赤峰古墳出土 康德九年十二月二十九日□装」とある。康德九年は1942年であり、北村の京城出張時の採集品のようである。

### (3) 北村千代治の齋藤報恩会資料調査

北村は1941(昭和16)年3月20日～4月19日に齋藤報恩博物館・函館住民民俗博物館・北大附属博物館へ長期の資料調査に出かけている。この時、撮影したとみられる南洋関係資料写真のベタ焼きが今回ご寄贈いただいた資料中に含まれていた(図31・32)。

図31-1写真中、左奥の石貨には「仙台市東三番丁齋藤報恩会」の墨書が見える。当時、日本の委任統治下にあったミクロネシア・ヤップ島収集資料である。東北帝國大學生物学教室の畑井新喜司<sup>しんきし</sup>が南洋熱帯植物研究の折に収集した資料で齋藤報恩会に寄贈されている。畑井は1925(大正14)年6月には学術研究総務部長に就任し、1931(昭和6)年には館長に就任し、1940(昭和15)年5月に館長兼学術研究総務部長を辞している(蛭名賢造1995)。北村が資料調査に出かけた折には、すでに退任しており、誰を訪ねて行ったのかは定かではない。図31-8・24に写る人物が資料担当職員のものであるが、不明である。

図31-1の石貨は齋藤報恩会自然史博物館閉館にあたり、2014年に国立民族学博物館に寄贈されている。

齋藤報恩会博物館は1945(昭和20)年7月10日の仙台空襲により、展示中の標本類はじめ約30万点といわれた収蔵資料のうち約3分の2と図書の大半を焼損したとされており(齋藤報恩会2009)、一部の化石や疎開資料は残ったようであるが、北村が撮影した南洋関係資料はその後の行方はたどることができず、この時失われたようである。

### (4) 葉書・手紙からたどる北村千代治

北村は多忙な中でも、こどもたちへの近況報告は出張先などで絵葉書を購入し、こまめに行っていた。1942(昭和17)年11月19日の輯安(現 集安)の壁画古墳の見学では、末の娘京子に当日の感動をホテルでしたため、平壤から送っている(図38-6)。この平壤府立博物館記念スタンプを押した絵葉書は京子のほかに、仁(仙台市第二十二部隊石山隊「は」)・禮(東京市豊島区雑司ヶ谷)に送ったものが現存している。兄たちには後日の発送となっており、仙台の実家で暮らす京子への父親としての愛情が察せられる。

図38-7には、1943(康德10)年5月8日に東京の次男禮からの手紙が遅く届いたことに、二度目の検閲のためでしょうとし、内容が当たり障りのない教育のことのみの内容だから嬉しいとしている。お互いの健康を気遣うばかりの文面の裏側には、当時の検閲制度が大きく横たわっている(小林英夫・張志强2006)。

図39は、1945(康德12)年8月8日に長男仁へ送った手紙である。満洲帝國政府の便箋<sup>びんせん</sup>の表裏にびっしりと文が書き連ねられている。大きく崩れた文字には、千代治の身辺に迫るただならぬ気配が漂っている。封筒は残されていない。

①ステーションホテル 北村千代治→宮城県仙台市北五番丁一九四 北村京子殿(消印 昭和17年11月19日・平壤府山手町)(図38-6)

「輯安の古墳の壁画は実に驚くべきものである主として蛇の紋様かいづれにせよ蛇と鳥が主なもので元色赤青黄黒茶褐が実に明瞭になってゐる。三本足の鳥などは餘程珍重されたものであったらしく大変勉強になった。帝室博物館の秋山課長と同伴で見学



図31 北村千代治の資料調査(1) (斎藤報恩会博物館旧蔵南洋資料 1941年撮影)

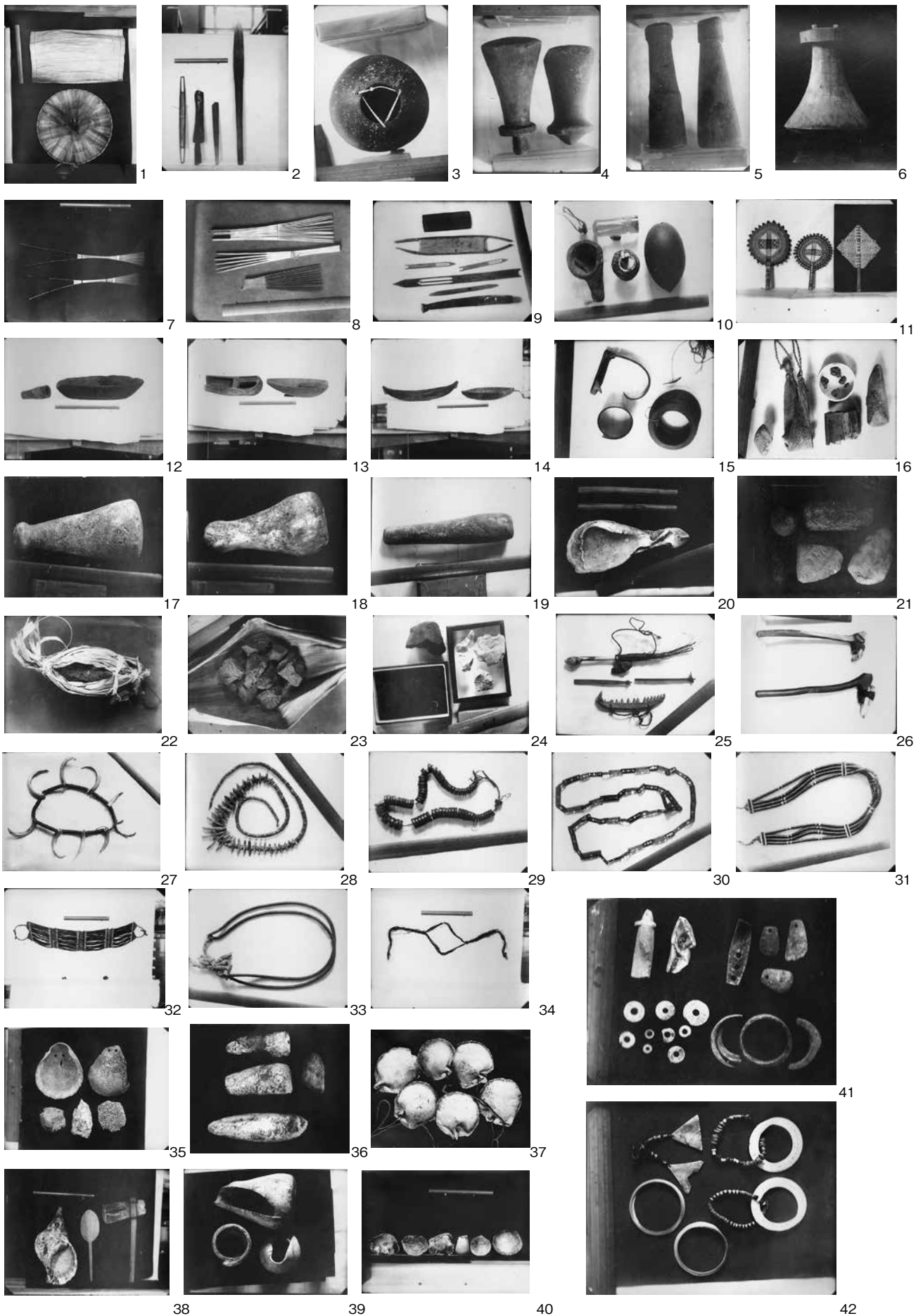


図32 北村千代治の資料調査(2) (斎藤報恩会博物館旧蔵南洋資料 1941年撮影)

した。十一月十八日夜」

(裏) 絵葉書(「鼈甲製龍佩写真) 昭和17年11月18日 平壤府立博物館記念スタンプ押印

②奉天市義光街三段 国立中央博物館奉天分館 北村千代治→東京市豊島区雑司ヶ谷三ノ三七 谷口徳工殿方 北村禮殿(消印 康徳10年5月8日・奉天中央)(図38-7)

「四月二七日附の手紙拝見。何時も元気でやってる由嬉しく又将来を期待してゐます。昨日奉天分館にやって来ました。明日帰ります。満洲も深緑の候となりましたよ。さぞ僕が帰る頃五月末なども深緑でせうね。帰国の道程は直行ではないのですよ。京城→福岡→大阪→神戸との仕事をして仙台に向ふのですから一寸目下の処予定はつきません。その都度御知らせ致しませう。では元気で待って下さい。

五月八日旅行先より 此のハガキは採って置きなさいよ。」

(裏) 絵葉書(「瑤臺艶雪図 清代 惲壽平(南田)筆 国立博物館蔵 六ノ二」写真)

③新京市 北村千代治→仁(封筒なし)(図39)

「仁へ 何んと多忙さには反って体が丈夫になった様な気がすることせうな。写真を見ると肉つきが何とも足らぬ様に見えるよ。もっと魚でも野菜物でも採ってくれ。過日の新聞で川渡辺が洪水らしいことがあったが恐らく下新田付近もと心配してゐます。何しろ新京もおれが来京以来初めての雨の多いこと。私の畑など三度も水を被ふってな。然し今日に立派に回復したよ。勿論川の辺りを耕作したのだからさ。禮からも此の頃手紙ないと心配してゐた処、母から一昨昨日は(二十三日付)、宏からは(七月二十五日付)昨日次々と来た。又本日禮から書留が来たよ。金五十円信の小遣として手渡して呉れとのこと、信は太原も山の中に入っているのだから為替は面倒なのです。何うせ九月中旬には、おれのところに戻って来るのだから、ソレまで保管する。

信としては私の友人に若しもの時には求めに応ずる様御願ひ申してありますから、マより七月の二〇〇円送った(電送)受け取ったとの通君の手紙が今日尚来ないが一体受け取ったのか何だか。若しものことがあれば遅くなるを調べるのに面倒ですから、

受けた時は必ず知らせて貰い度い。送金して後まで心配するのはいやですから、呉々も注意して下さい。

昨日までは暑いので毎日八十九度以上でしたが、九十度以上でした(室内)ところが今日は七十五度位となり、何んと変わったものです。恐らくこれから本当の秋の気候に入るのでないかしら。或は三寒四温の原則かもしれないが。何れにせよ温度が高い程農作物は上々さ。近頃歯が痛み出たことも気候の変化の然らし出るものです。夜中まで八十八度位であったので単衣だけで寝込んだ為めでもある。然し本日の様に冷しくなれば先づ歯もうづくまい。

禮の元山へも見舞行き度いと思ふてはゐるが仕事の都合で何うなるものかと心配してゐます。

京子より送付して貰った禮の夏の姿等の写真届きましたことを七月十七日に御返事を差し上げましたよ(五枚)。又写真の批評もして手紙を上げた筈です。時々手紙が前後する様ですね。詮方ないでせう。勝ち抜く為には真黒になって働くさ。大根も少々早く播いたのでトウが立ったのもあるよ。素人には仲々面白い芸でもある。

今朝は奉公日として詔書奉安日なので五時に起きアパート全員草取りでした。私は地均しをしたので少しつかれました。女は除草、男は地均とは私の案でしたが仲々地均しに賛成者が少なかったよ。毎日の自炊で多忙さ。ソレに防空。処が本式となった。新聞にあった通り、鞍山、本溪湖、大連の三ヶ所です。二度も三度もやって来るがロクなこと出来ないとのことです。然し、後は必ず本式に南洋島の様な下手でせうから注意と準備が大事です。例へ仙台でも油断は禁物。では健康でよ。

京子も。

八月八日

父

北村は1944年12月1日に国立中央博物館から離れ、文教部事務官に異動になっている、日本は1945年6月には沖縄戦も敗れ、7月には「満洲国」でも当時「根こそぎ動員」と言われた召集がかかり、「満洲国」内のすべての官庁・特殊会社に勤める日本人は老若を問わずほとんど召集の対象となり、政府の機能はほぼすべて停止したと言われている(池

宮城澄子1997)。北村のこの文面をみる限り、北村はこうした召集からは漏れ、日々の畑仕事と防空訓練をするほかなかったようである。

新京市では8月8日の日中に空襲警報が鳴り響いた(池宮城澄子1997)。北村文面の「処が本式となった。」はこのことを指しているものと思われる。この日の夜から未明にかけて、ソ連軍の空爆が新京市を襲い、ソ連軍の侵攻が始まった。8月8日以降の北村の動静は残されておらず不明である<sup>10)</sup>が、北村は引揚船「高榮丸」で翌年の8月18日に浦賀港に上陸(図38-9)している。満洲からの引揚の様子は、北村の博物館時代の同僚鹿間時夫が北村に宛てた手紙の中にも綴られている(図33)。

「日本人は計1万280名、そのうち七割は私の手で救ってやりました。人生五十年、こんな大量の人助けは稀な事まれです。金をもってくる奴からふんどくり、あはれな乞食にくれてやる義賊のまねも、医者もやりました。毎日、私の姿を見て泣かぬ女はゐませんでした。老幼男女、病人、妊娠婦、どれ程助けたか判りません。日本に帰りたいさで歩いてくる同胞のあはれな姿は真に血涙をしぼるものです。熱血漢の馬鹿な私は情熱をもやして不眠不休働き続けました。一生のうち、最も華々しい一時でした。圧迫、迫害の波の中でさまよへる小羊の同胞教育の勇士だったと思っています。色んな事がありました、

とても筆にかききれません。一生のうち又と得がたい経験でした。どんな立派な文学でも映画でもともあんなものは与へてくれませんでした。九月廿二日に日本行を決行、千数百名の輸送指揮官となり、略奪の道中を歩いて、廿九度をこし、仁川に出ました。三八をこしアメリカ管内に入った時は全く気抜けのように肩の荷が一きに降りました。命がけの脱出でしたから、開城まで当時私の名はひびみていたらしく、三八を越した田舎で見知らぬ連絡員が鹿間君鹿間君とよんで来、酒をのませてくれました。河原に寝ころび、本当にうれしう御在りました。仁川十月十日出帆、佐世保にてコレラ発生、十一月二日上陸、名古屋経由、当地に来ました。

名古屋の家は奇蹟的に助かりましたが、家は五軒に分けて人にかし、うち一軒に妹夫婦が住んでゐます。私の家族も家財も皆、当地信州の山の中にあり、皆で百姓してゐます。みんな無事で、よろこんでゐます。子供も大きくなりました。生きて再び子に再会し、偏ひとえに神の御寵おんちやうと感謝してゐます。京都の家は強制疎開でなくなり、福井に疎開した母と義姉りさいは罹災しました。兄も廿日に帰国復員し戦犯ともならず、母と京都で暮らしてゐます。」

## V 宮城民事部経済課顧問兼通訳時代

8月9日に浦賀港に着いた北村は仙台の自宅に戻った。仙台も前年7月10日に激しい空襲を受けているが、幸い北村の自宅のある北五番丁周辺は免れている。北村は早速、就職活動に取りかかり、10月23日に進駐軍に提出した履歴書の写しが残されていた(図37-9)。以後、約5年間、宮城民事部経済課顧問兼通訳として働くことになる。

進駐軍には米陸軍少佐のHoward A. MacCord, Sr. がおり、活動をともしている。MacCordは陸軍建設部所属で、三沢基地の飛行場拡張工事では、日本人数人を雇い発掘調査を行い、その研究成果はアメリカの学術雑誌に報告している。MacCordの考古学的な調査は北海道から千葉県の東日本全域に及んでおり、宮城県内では釜ヶ崎洞窟<sup>11)</sup>・大木囲貝塚・里浜貝塚・清水岩陰・宮野横穴墓<sup>12)</sup>の調査成果を

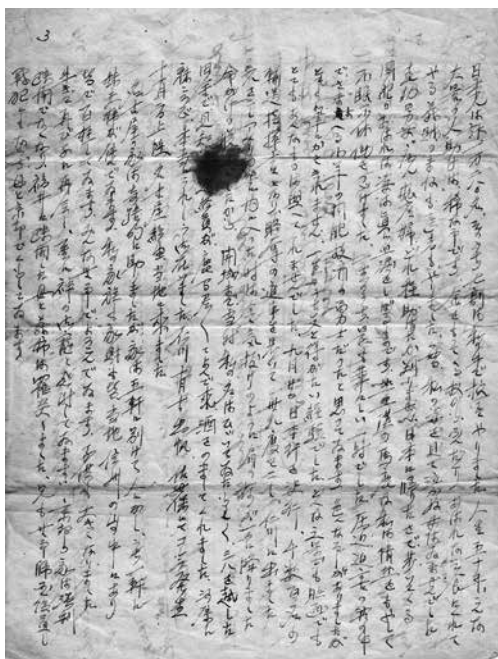


図33 鹿間時夫書簡(1946年12月ころ)



OPENING OF JAPANESE FOOD  
SHOP, SENDAI  
The Opening of the  
HIRATSUKA BUSSAN K. K.

図34 通訳としての北村 (1949.12.22)

発表している (MacCord1956)。北村と MacCord の関係を示す資料が図35である。2点の石器に付された書面には米国の未知の同好の士へ渡して欲しい旨が記されている。書面の右上に Maj MacCord と鉛筆書きがなされており、北村が MacCord に渡し損なった資料のようである。MacCord と北村が丸森町清水遺跡で小発掘調査を行っているのも間違いない (志間泰治・相原淳一 2016)。MacCord と北村は、空爆によって大きな被害を受けた仙台飛行場の改修工事<sup>13)</sup>あるいは斎藤報恩会博物館の「アメリカ CIE 図書館」への改装工事<sup>14)</sup>にも関わっていた可能性があるものの、その事跡は残されていない。

## VI その後

1949 (昭和24) 年、北村が進駐軍の仕事を退いてからも、考古学への関心は尽きることはなく、人から資料を譲り受けたり、新聞の切り抜き (表3) はその後も続けることとなった。特に新聞記事の切り抜きは、北村の関心の推移を知る上でも、興味深い。岩宿や葛生の日本人の起源、あるいは田舎館や立石寺における東北の意味付け、毛利コレクションなどの個人コレクションの行方など、いくつかのテーマに整理できそうである。最後の切り抜きが、「Early Christian Art of Japan Exhibited」とい

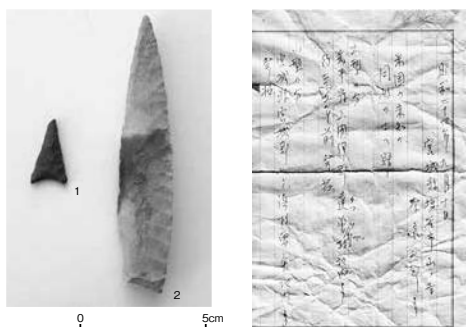


図35 奈良七郎氏から (1949年9月10日)



図36 晩年のご夫妻 (1979年ころ)

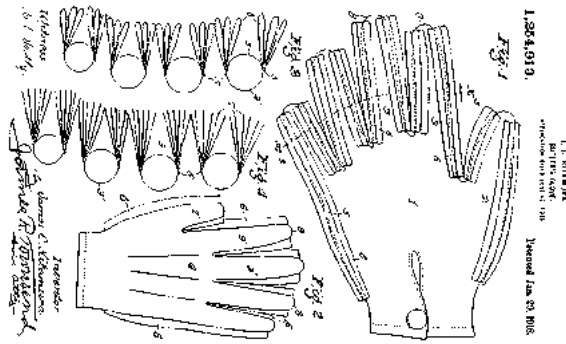
うのも、終生英字新聞を離さなかったという北村らしい。Virginia に無事帰った MacCord との友情も生涯変わらぬものであった。80歳を過ぎてからも「宮城県考古資料展」や「仙台の考古展」に足を運び、宮城県文化財友の会会員でもあった。1987 (昭和62) 年1月30日、97歳でその波乱に満ちた生涯を閉じた。

## おわりに

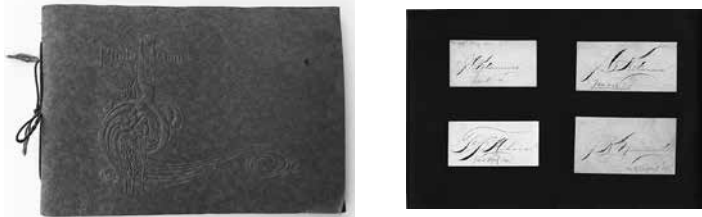
北村千代治コレクションには、縄文時代の希少なツキノワグマ歯牙穿孔垂飾品や角偶、あるいは5世紀代の須恵器が含まれており、その考古資料としての学術的な価値は高い。また、松本彦七郎に始まる「分層の発掘」を継承しつつ、東北帝国大学地質学古生物学教室あるいは斎藤報恩会博物館の自然科学系研究者とともに遺跡の調査を行った学史的な意味もまた極めて大きい。

北村のカリフォルニア移民や「満洲国」国立中央博物館あるいは進駐軍との仕事は明治から昭和時代を生き抜いた日本人のたどった足跡のひとつでもあり、近現代史の一断章という側面も有している。

本稿を草するにあたり、ご寄贈者の北村 優氏はじめご遺族の皆様からは種々の資料を提供していただき、また、国立科学博物館・国立民族学博物館・東北大学総合学術博物館・仙台市博物館・陸上自衛隊霞目駐屯地をはじめ、志間泰治・後藤勝彦・Keally, Charles T・藤沼邦彦・須藤 隆・斎藤取爾・富岡直人・石黒伸一郎・菅原弘樹・田村正樹・松崎哲也の各氏からも資料の提供や種々の有益なご教授を賜りましたことに感謝申し上げます。



1 北村の特許 Butler's Glove



2 American Penman School 提出の作品帳



3 北村の著作 (1917)



4 1911.9.7 M.Kimura から



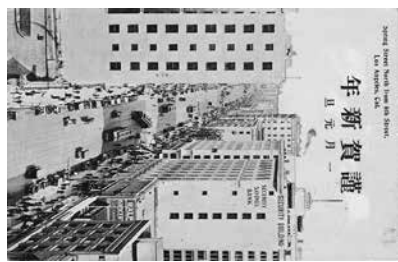
5 1913.6.3 R.Endo から



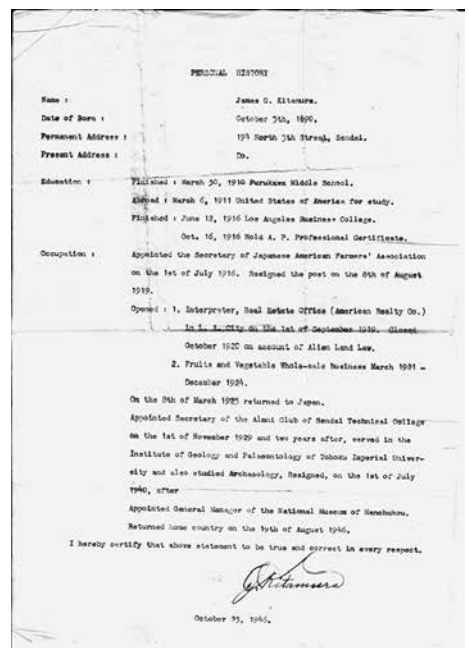
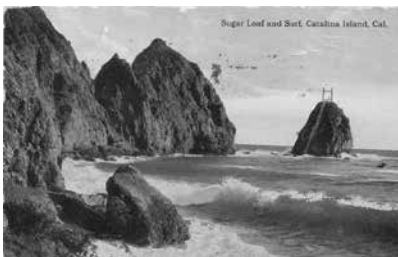
8 北村母校にヤシの実を教材用に寄贈



6 1913.1.31 T.Miura から



7 1915.1.23 R.Endo から



9 進駐軍に提出した Personal History

図37 北村千代治資料(書簡ほか)(1)



AMERICAN REALTY COMPANY  
 304 WHOLESALE TERMINAL BLDG.  
 LOS ANGELES

TELEPHONE 14777

LAND LEASER

東洋總代理店  
 米獨商會主  
**北村千代治**

仙臺市北五番丁一九四

1 北村の名刺 (1925)

Nov 21 - 1926

Nov 21	Kureta	11/20	1018-
Nov 26	Peterson	11/20	65-
Nov 27	Duganore	11/20	100-
Nov 28	Dumoni	11/25	50-
Nov 29	Ita	11/25	50-
Nov 30	Agreement to date 11-21-26		1273-

(Total) Collected - 11/21/26

1	Okunuma	150	50
2	Wakamatsu	80	
3	Yoda	30	
4	Chida	50	
5	Sakihara	20	
6	Kimura	35	
7	Kemoto	100	
8	Moriya	30	
9	Togawa	40	
10	Koyama	50	
11	Sakihara	35	
12	Kureta	65	
13	Sagawa	10	

2 顧客帳簿 (1926.11.21)

150

Carpenter	4274	50
Real Estate	7106	75
Banking	500	
Total		7668

448.59  
100.00  
378.59

7668.75  
3541.58  
4127.17

214.73  
100.00  
314.73

4733.39  
4733.39

12420.64  
12420.64

3 自宅建設 (仙台市北五番丁)

THE PROBLEM OF FINANCE IS MORE DIFFICULT.

Our conviction is that the financial system of America is not only the best in the world, but also the model for the world.

(By Professor John D. Brown)

The movement of a great industrial organization is a long and difficult process. It is not only a matter of money, but also of the human element. The success of a business depends upon the ability of its management to secure the cooperation of its employees. This cooperation is not only a matter of money, but also of the human element. The success of a business depends upon the ability of its management to secure the cooperation of its employees.

4 仙台高等工業学校同窓会事務局時代の仕事

No. 8454

*Utrypa reticularis* var. *Robblyni*

Loc. 支那四川省保寧府開化縣三岔河

Coll.

5 東北帝國大学理学部地質学古生物学時代の仕事

宮城縣 北村京子 様

仙台市北五番丁

北村京子 様

仙台市北五番丁

北村京子 様

仙台市北五番丁

6 北村京子へのはがき (1942.11.19)

POST CARD

北村 禮 様

仙台市北五番丁

北村 禮 様

仙台市北五番丁

7 北村 禮へのはがき (1943.5.8)

元満洲国在職申告調書

氏名	生年月日	職名	勤務期間	勤務地
北村千代治	1908年11月20日	技師	1931年8月1日 - 1945年8月15日	大連

8 元満洲国在職申告調書 (1956.3.31)

引揚者在外事実確認調査書

氏名	生年月日	職名	勤務期間	勤務地
北村千代治	1908年11月20日	技師	1931年8月1日 - 1945年8月15日	大連

9 引揚者在外事実確認調査書 (1956.6.19)

図38 北村千代治資料(書簡ほか) (2)



年 号	年齢	月	内 容	
1890 (明治23) 年	0	10月	5日、宮城県加美郡鳴瀬村下新田に北村周治・とわの三男として生まれた	
1910 (明治43) 年	19	3月	30日、古川中学校卒業後、東京正則英語学校高等科に通う	
		9月	15日、Morikawa氏 (California州Riverside市Crump Centra ave. 224) に私信	
1911 (明治44) 年	20	3月	6日、渡米。サンフランシスコ港から上陸	
		9月	7日、M. Kimura氏 (Santa Barbara, Cal) から北村 (1951 So. Grand Ave. Los Angeles, Cal) あて	
1913 (大正2) 年	22	1月	3日、Miura氏 (Busa, Cal) から北村 (708 1/2 S. Grand Ave. Los Angeles, Cal) へ賀状	
		7月	3日、R. Endo氏 (Avalon, Cal) から北村 (3189 Wilshire Blvd, Cal) へ	
1915 (大正4) 年	24	1月	23日、R. Endo氏 (Avalon, Cal) からFrank. Kitamura (3189 Wilshire Blvd, Cal) へ。World's Panama-Pacific Exposition in San Franciscoの記念スタンプ	
1916 (大正5) 年	25	6月	12日、Los Angeles Business College卒業	
		17日	Butler's glove (執事の手袋) 特許出願 (Serial No. 104, 637)	
		7月	1日、Japanese American Farmers' Association (日加農業組合) の事務として勤務	
	26	10月	16日、American Penman Professional Certificate (英習字教授資格) 取得	
1917 (大正6) 年	26	2月	22日、結婚のため帰国。鳴瀬尋常高等小学校に教授用標本としてヤシの果実1個を寄贈	
		3月	6日、中目博記氏夫妻の媒酌により、守屋ちよと結婚。11日、郷里出発	
		17日	再渡米	
1918 (大正7) 年	27	1月	29日、Butler's glove (執事の手袋) 特許取得 (US1254913 A) residing at Los Angeles, in the county of Los Angeles and State of California	
1919 (大正8) 年	28	8月	8日、Japanese American Farmers' Association 辞職	
		9月	1日、American Realty社不動産事務所 (Los Angeles) の通訳として勤務	
1920 (大正9) 年	30	10月	カリフォルニア外国人土地法 (Alien Land Law 排日土地法) により、事務所閉鎖	
1921 (大正10) 年	30	3月	青果卸の仕事 (Fruits and Vegetable Whole-sale business) 始める	
1924 (大正13) 年	34	12月	青果卸の仕事 (Fruits and Vegetable Whole-sale business) やめる	
1925 (大正14) 年	34	3月	8日、日本に帰国。米国のインスタントフリザア総代理店を仙台市北五番丁で開業	
1928 (昭和3) 年	37	6月	19日、Piggly Wiggly社からこのころミネラルウォーターを取り寄せる (8/7、12/18)	
		9月	29日、New Way Laboratories社から「Nu-Way」 (ほつれ用接着剤) 仕入れの勧誘	
1929 (昭和4) 年	38	1月	21日、12月30日に手紙で注文を受けた冷蔵庫未着の詫び状 (Stover Signal Engineering社)	
		39	11月	1日、仙台高等工業学校同窓会事務局勤務
1930 (昭和5) 年	39		東北帝国大学地質学古生物学教室に勤務。「昭和初年になると、新たに標本を維持管理する係ができて北村千代治、次いで二瓶惣一がこれにあたり、・・・という七名編成の体制が整った。」 (東北大学百年史編集委員会2005)	
	40	10月	18日、塩竈市崎山困窟調査	
		12月	24日、オハイオ州立大学Willard Berry教授の問い合わせに回答のLetter	
1931 (昭和6) 年	40	3月	26日、プリンストン大学地理学教室・バルボア公園自然史博物館にLetter	
1932 (昭和7) 年	41	9月	11日、故小川前東北帝国大学総長記念碑除幕式出席	
1933 (昭和8) 年	42	3月	25日、昭和三陸津波義捐金芳名帳 3円寄付 (河北新報社)	
1936 (昭和11) 年	45	2月	22日、研究室で記念撮影	
1937 (昭和12) 年	46		この年、岩手県女神洞窟・蛸ノ浦貝塚・下船渡貝塚調査	
		8月	28日、多賀城村橋本団貝塚発掘調査	
1938 (昭和13) 年	47	5月	29～30日、鳴瀬村長荻原又壽郎氏の好意により、下新田下宿 (字輪谷下) 遺跡を調査	
		6月	10日、仙台市小田原元天神遺跡発掘調査	
		8月	22日、宮戸島里浜貝塚発掘調査	
			「陸前加美郡鳴瀬村下新田下宿出土土器」『財団法人斎藤報恩会時報』第140号発表	
		9月	21日、多賀城村代木 (七ヶ浜村大木) 貝塚発掘調査	
	48	10月	9日、七ヶ浜村蛤浜八木畑貝塚発掘調査	
		11月	13日、浦戸村馬放島発掘調査	
			このころ塩竈町藤倉横穴遺跡? 調査・(色麻村?) ノ関字瓦焼坂調査	
		12月	1日、指波 (色麻村指浪) 洞穴? or横穴調査	
			29日、仙台市小田原調査・このころ宮城郡七北田調査	
1939 (昭和14) 年	48	1月	3日、多賀城村橋本団貝塚再調査	
			仙台市堤町、石碑 (墓石) 調査	
		5月	29日、七郷村霞ノ目、北村調査開始。(5日から仙台飛行場拡幅工事始まる。) 斎藤報恩会; 6月10日から発掘調査始まる (松本源吉日記: 石黒伸一郎2006)。	
		8月	8日～17日まで、斎藤報恩会博物館 (野村七平・村主岩吉) 宮戸島発掘調査 (東北帝国大学理学部地質古生物学教室の北村・曾根廣調査協力)	
			26日、南方村青島貝塚発掘調査	
		9月	1日、仙台飛行場堀南側発掘調査	
			2～3日、廣原村菜切谷元薬師堂址・城生館跡調査	
		10月	1～5日、岩手県一戸町梅垣鼎三氏宅・福岡町國香郁太郎氏宅資料調査 (幕前遺跡=蔭前遺跡か)、青森県是川村中居一王寺圃調査・館岡村亀ヶ岡遺跡調査	
	49		8日、23日仙台飛行場発掘調査	
		11月	3日、12日、19日仙台飛行場発掘調査	

表1 北村千代治年譜(1)

年 号	年齢 月	内 容
1940 (昭和15) 年	49 7月	1日、「満洲国」国立中央博物館事務官(薦二)として渡満。「満洲国」国立中央博物館は1939年設立
1941 (昭和16) 年	50	1月～7月、出張(新京本館) (国立中央博物館1941)
		2月 5日～8日、奉天分館の敷地の一部民間所有に編入せる理由調査の為奉天、安東へ出張(国立中央博物館1941)
		3月 17日～19日、事務打合せの為奉天分館へ出張(国立中央博物館1941) 20日～4月19日、仙台・岩手・函館・札幌へ出張(斎藤報恩会博物館・函館住民民俗博物館・北大附属博物館視察) (国立中央博物館1941)
		7月 2日～4日、事務打合せの為奉天分館へ出張(国立中央博物館1941)
	51	8月 7日～9日、資料蒐集の為奉天へ出張(国立中央博物館1941)
		10月 16日～19日、事務打合せの為奉天分館へ出張(国立中央博物館1942a)
		12月 4日～5日、事務打合せの為奉天へ出張(国立中央博物館1942b)
		23日～1月1日、資料蒐集の為承德へ出張(国立中央博物館1942b)
1942 (昭和17) 年	51 6月?	村主岩吉抜刷(「ボナペ島の人類遺跡並にナマンタール遺跡概要」『科學南洋』4-3) 受取
		8月 3日～6日、事務打合せの為奉天へ出張(国立中央博物館1942c)
		9月 10日～13日、資料事務打合せの為奉天へ出張(国立中央博物館1942c)
	52	11月 14日14日～21日、高句麗遺跡視察に韓安へ、蒐集事務打合せの為奉天へ出張(国立中央博物館1942c)。18日平壤府立博物館記念絵葉書に記念スタンプ、新京に帰ってから、東京の次男 禮へ12月7日夜、葉書
		12月 25日～1月5日、博物館事務連絡の為京城へ出張(国立中央博物館1943a)
		「満洲国」国立中央博物館総務科長就任
1943 (昭和18) 年	52	4月 21日～27日、羅振玉蒐集品接受準備のため旅順、奉天出張(国立中央博物館1943b)
		5月 7日～10日、資料蒐集事務打合せ並事務引継立合のため奉天分館出張(国立中央博物館1943b)。東京の次男 禮へ5月8日、葉書
		6月 2日～7月6日、満洲日々新聞社に貸与せる不返戻列品に関し紛失せし現地調査のため京城、福岡門司、大阪、京都、東京、仙台方面出張(国立中央博物館1943b)
	53	10月 14日～16日、資料事務打合せの為奉天へ(国立中央博物館1944)
12月 16日～1月21日、学芸官後任物色の為京都、東京、仙台へ(国立中央博物館1944)		
1944 (昭和19) 年	53 4月	随筆「鳥骨と飛行機」(『国立中央博物館』第22号所収) (国立中央博物館1944)
	54 12月	1日、「満洲国」国立中央博物館総務科長から「満洲国」文教部事務官(薦一)に異動
1945 (昭和20) 年	54 8月	8日、仁へ手紙
		9日午前零時、ソ連軍新京空襲 15日、「満洲国」文教部事務官(薦一)として終戦。終戦時の住所は新京特別市至聖大路第二聚合官舎202号
1946 (昭和21) 年	55 8月	18日、コロ島(遼寧省葫蘆島)から高榮丸にて浦賀港に引き揚げ
	56 10月	23日、進駐軍へpersonal history(履歴書)提出 宮城民事部経済課顧問兼通訳(進駐軍顧問兼通訳)として5年間、勤務
1947 (昭和22) 年	56	仙台飛行場の遠見塚古墳調査(伊東信雄「遠見塚古墳」)か?
1948 (昭和23) 年	57 6月	20日、日魯漁業株式会社石巻支所視察に随行
	58 12月	MacCord氏、丸森町清水遺跡(調査:志間泰治氏)視察に随行。小発掘調査を行う
1949 (昭和24) 年	58 8月	7日、MacCord氏と里浜貝塚を3時間踏査(surface collection)
		20～21日、MacCord氏と清水岩陰遺跡発掘調査
		MacCord氏・村主岩吉氏と釜ヶ崎(崎山圃)洞窟発掘調査。9月にも再発掘調査
		MacCord氏とこのころ、大木圃貝塚踏査(representative surface collection)
	59 12月	18日、MacCord氏・Ono Takagi氏と宮野(小館山)横穴墓1基発掘調査 22日、仙台市平塚物産(Japanese Food Store)開店式に随行 このころ通訳辞める? 『復興新聞』第64号(12月21日 宮城県水害復興会議発行)に「北村元宮城民事部通訳」の記載が見える(「解説ブラック・ベリー 一石数鳥の働きを アダムス大尉の贈物」)
1956 (昭和31) 年	65 3月	31日、「元満洲国(北支、蒙疆を含む)在職申告書」
	6月	19日、「引揚者在外事実調査表」に在外事実確認先として遠藤隆次氏(埼玉大学学長)
1957 (昭和32) 年	67 11月	8日、「引揚者給付金認定通知書」(宮城県知事 大沼康)
1958 (昭和33) 年	67 1月	8日、証券交付済 日本銀行仙台支店
1966 (昭和41) 年	75 1月	13日消印、Howard A. MacCord, Sr. から年賀状(Fairfield, Australia から絵葉書)
1967 (昭和42) 年	77 12月	15日消印、Howard A. MacCord, Sr. からクリスマスカード(Richmond, Virginiaから)
		20日消印、Mitsuye Suzukiからクリスマスカード(Los. Angels, Californiaから)
1969 (昭和44) 年	78 5月	10日、「特別史跡多賀城廃寺跡の概要」(宮城県教育委員会・財団法人宮城県文化財保護協会)
		Eisenhower元アメリカ合衆国大統領葬儀に弔意。米国大使館(東京都赤坂)から会葬御礼状
79 12月	16日消印、Howard A. MacCord, Sr. からクリスマスカード(Richmond, Virginiaから)	
1971 (昭和46) 年	80 11月	8日、支倉常長顕彰記念式列席
1972 (昭和47) 年	81 7月	15日～8月15日の『宮城県考古資料展』(宮城県図書館郷土資料室)見学
1977 (昭和52) 年	87	Howard A. MacCord, Sr. (前年にVirginia State Library退職)から贈本『artifacts of Prehistoric America』(Louis A. Brennan著)
1978 (昭和53) 年	87	宮城県文化財友の会会員(会員No. 154)
1980 (昭和55) 年	89	『仙台的考古展 昭和54年度発掘調査の概要』見学
1987 (昭和62) 年	97 1月	30日、死去

表2 北村千代治年譜(2)

西暦	昭和	月	日	新聞	記事	備考
1939	14	5	28	河北新報	珍しい石器を發掘	仙臺飛行場拡張工事中
1939	14	6	24	河北新報	前人未踏の洞窟を調査	
1939	14	8	26	河北新報	松島灣宮戸島に地質、考古のメス	發掘の成果期待さる
1939	14	9	8	河北新報	八戸市内から古土器發見	
1939	14	10	28	河北新報	市内の豪雨被害	
1939	14			建国創業の時代より㉑	日本石器時代人 即日本人説(下) 東大理学教授、醫學博士 長谷部言人	
1940	15	1	14	讀賣新聞	肇國の太古偲ぶ	土器、大量に發掘 群馬県の吾妻盆地に貴重な遺跡
1940	15	3	3	河北新報	仙臺飛行場附近は	先住民の遺蹟 若き学徒の一大貢獻
1940	15	4	25	河北新報	貝塚圖録完成	石巻市毛利、遠藤兩氏が出版 考古学界の珍貴資料
1940	15				國寶法隆寺と同一	古刹秦泉寺遺跡明確に立説さる
					學界の珍・生きてゐる化石貝	
					蝦夷塚の正體	武装移民の墓と判る
					東北の最北端!	津輕から獸脚土器
					貴重な學術資料	野澤校の葛西訓導發見
1947	22	7	9	河北新報	考古	佐々久
1947	22	7		河北新報	遺跡研究の意義	
1947	22	7		河北新報	上川名の貝塚	
1947	22	11	29	河北新報	珍しい上代石棺	霞野古墳の發掘すすむ
1947	22	12	2	河北新報	千古の傳説白日に	福島・霞野古墳群發掘進む
					天保年間餓死者の塚	栗原郡岩ヶ崎町で發見
1948	23	4	9		「杭上住居」物語る	支柱やかめ發見
1948	23	4	11		昔の人はこんな生活を	掘り出された大泉堤防の遺跡
1948	23	4	13		「田げた」も發見	大農耕集落地と推定
1948	23	7	26			貴重な資料 一上沼遺跡-
1948	23	11	22		古代「玉」のヒスイ	全部が國内産
1949	24	1	20	夕刊とうほく	新國宝紹介	本間順次
1949	24	3	29		門外不出の太刀	兵庫鞘太刀 毛抜き形太刀
1949	24	3	29		ねらわれた考古学資料	毛利コレクションが税の対象に
1949	24			学都仙台	陶山 務	
					千余年前の傳説をひらく	
					出て来た遺骨五体	山寺立石寺の慈覺大師
					三百年前の切支丹秘宝公開	美術的にも当時しのぼす参考品
1949	24	9	12	河北新報	土器や創掘出す	宮野 ガケ崩れから古墳
1949	24	9	20	夕刊とうほく	十数年前の調査へ	群馬県で發掘
1949	24	10	22		瑞巖寺の観音帰る	無残、兩腕を切られて
1949	24			夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
1949	24			夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
1949	24			夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
1949	24			夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
1949	24	12	16	夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
				夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
				夕刊とうほく	堤焼	菅原東香
1949	24	12	21	復興宮城	解説	
					ブラックベリー	一石数島の働きを
					京都御瓦師のあと	伊藤瓦屋
					創業二百六十年前	
1949	24	12	26	河北新報	仙台老舗繁盛記(11)	依客桶屋の分家
					長塚古墳發掘始まる	創業百二十年前
1951	26	3		河北新報		
1951	26	3	20	河北新報	「関東に遅れぬ文化」	長塚古墳發掘
1951	26	3	25	河北新報	彌生式土師の中間期判明	敵に備えて”とりで”
1951	26	3	27	河北新報		東北に類ない積石塚
1951	26	4	15	河北新報	学芸	樋口清之
1951	26	4	22	河北新報		
1951	26	11	10			
1952	27	4	22	河北新報		
1952	27			名人訪問		
1952	27			古川古墳		
1952	27	4	14	河北新報		
1953	28	7	6	日本経済新聞		
1954	29	12	27	河北新報	みちのくに美を求めて	認められた「葛生原人」 直良早大教授が栃木県下で發掘 近く本格的發見へ
1956	31	4	20	河北新報		
1956	5	29		THE MAINICHI		
					郷土の美	
					魚ヶ岡式土偶	世界三大土器の一つ
					秋田蘭画	異国をしのぶ画風
1957	32	4	21	河北新報		
1957	32	5	25	河北新報		
1957	32	12	12	河北新報		
1958	33	2	2	河北新報	みちのく通信	寒村でなかった郡山
1958	33	5	10	河北新報		
1958	33	7	8			
1958	33	7	15	河北新報		
1958	33	8	21		美の美	尾崎尚盛
1958	33	10	29	河北新報		
1958	33	11		河北新報	学芸	
1958	33	12	4	河北新報		
					二口科学	
1959	34	1	27			
1959	34	2	3	河北新報		
1960	35	11	9	毎日新聞		
1960	35	11	15	毎日新聞		
1961	36	2	21	毎日新聞		
1961	36	3	28	毎日新聞		
1961	36	5	9	河北新報		
1961	36	5	24	毎日新聞		
1961	36	8	7	河北新報		
1962	37	11	9	毎日新聞	モリ	伊東信雄
1962	37			河北新報	経済教室	
1962	37			河北新報	経済教室	
1968	43	9	8	河北新報		
1969	44	5	16	河北新報	文化	坂本太郎
1969	44	11	5	河北新報		
1970	45	1	9	毎日新聞		
1970	45	4	8	河北新報	書十話	①有井凌雲
1970	45	4	22	河北新報	書十話	②有井凌雲
1970	45	5	6	河北新報	書十話	③有井凌雲
1970	45	5	20	河北新報	書十話	④有井凌雲
1970	45	6	3	河北新報	書十話	⑤有井凌雲
1970	45	7	1	河北新報	書十話	⑥有井凌雲
1970	45	7	15	河北新報	書十話	⑦有井凌雲
1970	45	7	29	河北新報	書十話	⑧有井凌雲
1970	45	8	12	河北新報	書十話	⑨有井凌雲
1971	46	9	14	河北新報	第二朝刊 特集	
1974	49	1	4	Daily News Mainichi		

表3 北村千代治の新聞切り抜き(スクラップ帳から)



## 【註】

- 1) この「写真花嫁」制度は人身売買のおそれがあると国際的な非難を浴び、1920（大正9）年には、日本政府は写真花嫁に対するパスポート発給を停止している。
- 2) 北村 仁1989参照
- 3) 鹿間時夫1979『古脊椎動物図鑑』（朝倉書店）の略歴によれば、1912年京都市生まれ、1936年東北帝國大学卒業、1942年満洲国立新京工業大学教授、1950年横浜国立大学教授、1978年死去。渡満するまで研究生、助手として大学に在籍していた。
- 4) 1889-1966.1.6（村主 巖1995）。村主の調査資料中、石器石材の同定を東北帝國大學理学部岩石学教室加藤謙次郎氏、自然遺物の同定を同地質学古生物学教室の曾根廣氏に依頼（村主岩吉1929）しており、教室に出入りしていたことを確かめることができる。村主の南小泉遺跡の論文（村主岩吉1943）中では、直接北村に謝辞が述べられている。
- 5) 奥津1960には、図24の断面図が掲載されている。
- 6) Howard A. MacCord, Sr. (1915-2008)。第2次世界大戦・朝鮮戦争に従軍。三沢基地内と基地周辺の遺跡の発掘調査は米陸軍建設部のHoward A. MacCord少佐と彼が雇った数人の日本人が行った。MacCord少佐は、その結果をアメリカの考古学雑誌に発表した。かつ、発見された遺物はアメリカのスミソニアン博物館に展示された（キリーC. T 2007）。  
1962年退役後は、Virginia State Libraryの職業的考古学者として勤務し、州内160ヶ所以上の遺跡を調査し、127本以上の報告がある（Archaeological Society of Virginia 2008）。
- 7) 「満洲国」国立中央博物館については、『国立中央博物館時報』第1号（国立中央博物館1939）・『新博物館態勢』（名古屋市博物館1995）・『反博物館論序説』（犬塚康博2015）・『「満洲国」博物館事業の研究』（大出尚子2014）参照。
- 8) 1941年10月に総務科長との記載もあるが（『国立中央博物館時報』第15号、1942年、15頁）、その前後の時期に事務官となっているので、正式に総務科長に就任したのは1943年だと考えられる。「博物館動態新京本館出差」『国立中央博物館時報』第21号、1943年、41頁参照。「引揚者在外事実調査票」参照。
- 9) 三宅宗悦（1905-1944）人類学・考古学者。1938年3月に京都帝國大学を辞し、「満洲国」国立中央博物館に籍を置く。翌1939年、国立博物館奉天分館長に就任。1941年夏辞職し、京都に戻る。同年12月陸軍に召集され、1944年フィリピンレイテ島で戦死。
- 10) 「家庭の事情（父満洲で不明）」（北村 仁1989）とある。
- 11) 塩竈市内の半島で貝層を伴う波蝕洞とあり、崎山囲洞窟（永澤譲治1931）と推定される。北村資料中にも1930.10.18「塩釜崎山囲洞窟」収集資料がある。
- 12) 栗原市築館上宮野小館山横穴墓のことである。1948年のアイオン台風で崖崩れし、開口した。翌49年宮野中学校校長成瀬宗治氏が発掘調査をしている。北村の切り抜いた記事（1949.9.12）が残されている。
- 13) 逋信省所管飛行場として設置された仙台飛行場には、1938年5月に仙台乗員養成所設置、1941年には仙台地方航空機乗員養成所も併置された。戦況が悪化し

た1944年には陸軍所管となった。同年8月には米軍艦載機による攻撃を受けた。同10月に米軍は仙台飛行場に駐屯し、12月には引き渡し調印式が行われ、これ以降レニア・フィールドとして米軍の補助飛行場となり、一般市民の立ち入りは禁止された（中川正人2014）。1947年、飛行場修理のために遠見塚古墳の土取りが行われ、1㎡ほどの発掘調査が東北大学伊東信雄らによって行われている（伊東信雄1954）。ここに「二名の米兵の援助」と記されるが、不詳である。

- 14) 斎藤報恩会の建物は進駐軍に接収され、「アメリカCIE図書館」（アメリカ文化センター）として利用された（斎藤報恩会2007）。北村の職務からも何らかの関与が考えられるが、不詳である。

## 【引用参考文献】

- Archaeological Society of Virginia 2008「Howard Arthur MacCord, Sr. 1915 to 2008」『Newsletter of the Archaeological Society of Virginia』No.191
- Howard A.MacCord 1956「Contributions to the Northern Honshu Part III, Sites in Miyagi and Chiba Prefecture」『American Antiquity』21-3, pp.275-287, Society for American Archaeology
- 相原 淳一 2015『東北地方における最古の土器の追究 1914.1.28 - 2011.3.11』纂修堂
- 池宮城澄子 1997「新京・終戦前後の私の思い出」『平和の礎 満州引き揚げ者が語り継ぐ労苦』7、244-258頁、平和祈念展示資料館
- 石黒伸一郎 2006「松本源吉の陸奥国分寺跡と南小泉遺跡の研究」『宮城考古学』8、167-188頁、宮城県考古学会
- 伊藤 大介 2014「昭和三陸津波と東北帝国大学」『東北大学史料館紀要』第9号、45-59頁
- 伊東 信雄 1935「樺太の石器時代の遺跡遺物」『ドルメン』4-6、109-114頁、岡書院
- 伊東 信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』19-44頁、東北帝国大学国史学会
- 伊東 信雄 1954「遠見塚古墳」『宮城縣文化財調査報告書』宮城県文化財調査報告書第1集
- 伊東 信雄 1957「古代史」『宮城県史』第1巻
- 伊東 信雄 1976「東北古代文化の研究 - 私の考古学研究 -」『東北考古学の諸問題』535-551頁
- 伊東信雄先生追悼論文集刊行会 1990「伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷」
- 伊藤真実子 2007「一九一五年パナマ太平洋万博とサンフランシスコ排日運動」『メディア史研究』23、25-41頁、メディア史研究会
- 犬塚 康博 2015『反博物館論序説 - 20世紀日本の博物館精神史』66-69頁、共同文化社
- 岩手県教育委員会 1998『岩手の貝塚』岩手県文化財調査報告書第102集
- 岩手県教育委員会 2000『岩手の洞穴遺跡』岩手県文化財調査報告書第106集
- 蝦名 賢造 1995『畑井新喜司の生涯』西田書店
- 大出 尚子 2012『日本の旧植民地における歴史・考古学系

- 博物館の持つ政治性－朝鮮総督府博物館及び「満洲国」国立(中央)博物館を事例として」『東洋文化研究』14、1-28頁、学習院大学東洋文化研究所
- 大出 尚子 2014『「満洲国」博物館事業の研究』117-226頁、汲古書院
- 大山 柏・八幡 一郎 1925「岩手県南部石器時代遺跡調査旅行」『人類学雑誌』40-10
- 奥津 春生 1943「仙臺飛行場遺蹟より發掘された植物遺體について」『古代文化』14-1、9-27頁、日本古代文化学会
- 奥津 春生 1960「仙台平野下に分布している第四系の地質と植物遺体について」『東北大学理科報告(地質学)』特別号4、448-460頁
- 北村 仁 1989「私の履歷書」『大学体育』16-1、39-45頁、全国大学体育連合
- 北村千代治 1917「アーム・ムーヴメント」『英語世界』2月号、11-2、16頁、博文館
- 北村千代治 1938「陸前国加美郡鳴瀬村下新田下宿出土土器」『斎藤報恩会時報』140、1-5頁、財団法人斎藤報恩会博物館
- 北村千代治 1944「鳥骨と飛行機」『国立中央博物館時報』22,32・40頁、国立中央博物館
- キーリ C. T 2007「日本の考古学に貢献した欧米人達－欧米人たちによる日本の考古学－」多摩考古学会2007年度講演要旨
- 清野 謙次 1925「後志國余市の貝塚外四篇」『民族』1-1、161-166頁、民族發行所
- 国立中央博物館 1939『国立中央博物館時報』1、10-11頁
- 国立中央博物館 1941『国立中央博物館時報』14、25-26頁
- 国立中央博物館 1942a『国立中央博物館時報』15、15頁
- 国立中央博物館 1942b『国立中央博物館時報』16、20頁
- 国立中央博物館 1942c『国立中央博物館時報』18、44頁
- 国立中央博物館 1943a『国立中央博物館時報』19、38頁
- 国立中央博物館 1943b『国立中央博物館時報』21、41頁
- 小林 英夫・張 志強 2006『検閲された手紙が語る 満洲国の実態』小学館
- 斎藤報恩会 2009『財団法人斎藤報恩会のあゆみ－財団85年・博物館75年－』
- 残間 強 1976『仙台飛行場の歩み綴り』(謄写版)霞目駐とん地モニター会
- 鹿間 時夫 1979『古脊椎動物図鑑』朝倉書店
- 志間 泰治・相原 淳一 2016「歴史を掘り起こす」『宮城考古学』18、157-170頁、宮城県考古学会
- 村主 巖 1995「父・村主岩吉のこと」『メモランダム－市井の医師の小さな真実－』106-110頁、日曜隨筆社
- 村主 岩吉 1928「塩釜附近の先史時代遺跡と原石採取地址」『考古学雑誌』18-12、20-33頁
- 村主 岩吉 1929「塩釜附近の先史時代遺跡と原石採取地址(二)」『考古学雑誌』19-2、47-54頁
- 村主 岩吉 1942「ボナベ島の人類遺跡並にナマントール遺跡概要」『科學南洋』4-3、日本學術振興会
- 村主 岩吉 1943a「仙臺市東郊－仙臺飛行場を中心とする彌生式文化の研究－」『古代文化』14-5、1-36頁、日本古代文化学会
- 村主 岩吉 1943b「彌生式及原史文化概観」『斎藤報恩会時報』199、1-10頁、財団法人斎藤報恩会博物館
- 竹内 貞子 1997「斎藤報恩会博物館から斎藤報恩会自然史博物館へ」『協会誌 大地』25、47-53頁、東北地質調査業協会
- 東京国立博物館 2009『東京国立博物館所蔵骨角器集成』
- 東北大学百年史編集委員会 2005『東北大学百年史』五 部局史二
- 東北大学文学部 1982『考古学資料図録』
- 中川 正人 2014「七郷」『仙台市史 特別編9 地域史』仙台市史編さん委員会
- 永澤 讓治 1931「陸前国塩釜港字崎山洞窟の石器及び古墳時代遺跡に関する略報」『史前学雑誌』3-1、6-17頁、史前学会
- 名古屋市博物館 1995『新博物館態勢』
- 日本古生物学会 1970『日本古生物学の回想』
- 野田 光雄 1995「回想」『新博物館態勢』7-8頁、名古屋市博物館
- 長谷部 言人 1919「石器時代に於ける糞石」『人類学雑誌』34-11・12、394-396頁
- 早瀬 亮介・菅野 智則・須藤 隆 2006「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木冨貝塚出土基準資料」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.5、1-40頁、東北大学総合学術博物館
- 原 明芳 2005「陸軍松本飛行場跡についての覚書」『長野県考古学会誌』110、1-28頁、長野県考古学会
- 藤沼 邦彦 1981「宮城県における縄文時代研究略史(江戸時代～昭和20年)」『東北歴史資料館研究紀要』7、1-42頁
- 増田孝一郎 1982「斎藤報恩会自然史博物館」『化石』31、47-50頁、日本古生物学会
- 松本 源吉 1939「仙臺飛行場附近の出土物に就て(八月十九日開會の座談會に於ける談話の概要)」『仙臺郷土研究』9-9、4-6頁、仙臺郷土研究会
- 松本 子良 2003『理性と狂気の狭間で 前・後編』
- 松本彦七郎 1919a「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」『人類学雑誌』34-5、161-166頁
- 松本彦七郎 1919b「宮戸島里浜介塚の分層的发掘成績」『人類学雑誌』34-9、285-315頁
- 松本彦七郎 1919c「宮戸島里浜介塚の分層的发掘成績(続)」『人類学雑誌』34-10、285-315頁
- 松本彦七郎 1927「陸前国気仙郡蛇王洞窟の石器時代遺跡」『人類学雑誌』42-2、55-58頁
- 山口彌一郎 1943『津波と村』恒春閣書房
- 山内 清男 1924「磐城国新地村小川貝塚発掘略記」『人類学雑誌』39-4、212-216頁
- 山内 清男 1929「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1-2、117-146頁、史前学会
- 山内 清男 1964「小川貝塚」『福島県史第6巻 考古資料』31-32頁、福島県
- 山内先生没後25年記念論集刊行会 1996『画竜点睛－山内清男先生没後25年記念論集－』
- 若林 勝邦 1890「磐城国宇多郡新地村貝塚発掘ノ話」『東京人類学会雑誌』6-57、104-108頁